

『ローマ書』を読む 第1回（第1～4章）

2010年7月18日（東京 新宿）

奥田 昌道

ローマ書のダイジェスト（エッセンス）版 宗教は納得の世界 ローマ書の聖書全体の中での位置づけ 信じせしめられる ローマ書第1章 福音は救を得させる神の力 神の義は福音のうちに顕れた ローマ書第2章 ローマ書第3章 ローマ書第4章 祈り 新約聖書『ローマ書（第1回）レジュメ』

●ローマ書のダイジェスト（エッセンス）版

私をおして、キリストというのはどんなに素晴らしいお方であるか、そして、今の我々に、今現在に生きている私達にとって本当になくしてはならないものだとということを知っていただきたい。これからローマ書の1章から4章をやりますが——京都では1回到1章をやって4回やってきた——その4回を今日一遍にやるということは、ダイジェスト版ということになります。本当にエッセンスをここにまとめて、皆さんと一緒にやろうということなんです。

ローマ書が素晴らしいのは、パウロという人の立場を考えていただいたらわかる。彼はユダヤ教の中のチャンピオンです。モーセに始まりイエス・キリストまでの律法の中でユダヤの民族は生きてきた。その中のエリート中のエリートです。律法に生きるということは、律法違反を犯しているキリストを断罪する。キリストはなにも他の罪で審かれたのではない。まさにユダヤ人によつて、ユダヤ教をこわす——彼等は「ユダヤ教は神さまからいただいたものだ」と信じていて、ユダヤ教の中の大黒柱は律法だという——その律法をキリストは壊してかかっている。たとえば、「安息日を守れ」という律法があります。キリストは安息日にどんな人を癒していかれた。いわば律法に対する挑戦と受けとめるわけですね、彼等は。他の日ならいいんです、キリストのやっている御業は。けれども、安息日はだめだと。それに対してキリストは、「安息日とは何か。本来の意味はなにか」ということを問われたわけです。本来の意味は何かというと、

「神さまの働き給う日だ。人は人間の業を休んで、神さまに100%働いていただき、自分を委ねていく。そこに神が働き給う。これが本当の安息日の意味だ。」

神が働き給う日が安息日だ」

と、キリストは受けとった。だから、安息日にいろんな御業をなさっていますね。

「父は今にいたるまで働き給う。我もまた働くなり。父と我とは一つなり」と仰った。今度は、

「神を冒瀆するものだ。人間の分際でありながら、己を父なる神とイコールに



結んでいる。これは怪しからん」

と。だから、「神を冒瀆する」ということと、「安息日をはじめ、いろんな律法を破っていく」というこの二つで、これはもう国賊なんですよ。ユダヤ人にとっては宗教がすべてですから、「国賊はやつつけろ!」ということで、キリストを迫害していく。それが十字架になったわけですよ。

ところが、「キリストは復活した」と称して、また「キリスト、キリスト」と言う者が出てきているので、「こんなやつは全部つぶしてかからないとユダヤは滅びるぞ」という愛国心に燃えて、キリスト教徒を引つ捕らえては、大祭司の所へ連れてくるという、そういう役目でパウロはいきりたつてダマスコへ向かっている時に、キリストは現れたわけですよ。まったく予期せざる時にキリストが顕れて、パウロはぶつ倒された。目が見えず、ものも言えない。三日間、闇黒の中にパウロは過ごします。そして、アナニヤの按手をおしてパウロの「目から鱗のごときもの落ちたり」という。

「あなたはどなたですか?」

「お前が迫害しているイエスである!」

そういう御声があったと、使徒行伝の9章、22章、26章の三か所にわたつて、パウロは自分の回心の状況を語っています。

そういうふうに、パウロというのはユダヤ教の中のユダヤ教ということで、エリートとしてやってきた。それが熱心であれば熱心であるほど、神さまの御意に反しているということに気がつくわけです。これはもう愕然^{がくぜん}とせざるを得ない。私利私欲でやっていない。義のためにやっている。「神さを大事に」と思つてやっているのが、実は神さまにそれが真つ向から逆らっていることに気がついた。

ふり返つてみると、自分の背後にいる民族が同じことを相変わらず続けている。これはいかんと。だから、たとえ自分がキリストから呪われ棄てられるようなことがあつても、この民族を救いたい、救つてほしいという願いをガラテヤ書なんかで述べています。それからローマ書の中でも9章から11章がそれなんです。

8章まではずっと救いのことを述べてきて、「救いとはどういうものか」ということを述べてきて、9、10、11章は「ユダヤ人を救ってください」という祈りの章です。12章からは、「クリスチャンはどのような生活をしていくべきか。現実の生活の中でどうあるべきか」ということを説いているのが12章から16章までです。そういう構造になっている。

ですから、パウロはユダヤ世界のことを知り尽くしている。それから今度は、異邦人に向かつて伝道している。異邦人というのは、ユダヤ人から見たら、これは全然、神の民ではないわけですから、異教徒というのは神さまから見放された存在なんです。もしも、神さまの救いを求めるならユダヤ人に切り替われ。具体的にいうと、「割礼を受けて宗教的にユダヤ人になれ」というのがユダヤ教の言わんとするところです。それに対してパウロは、



「そうじゃない。割礼なんか要らない。割礼があろうとなかろうと、律法があろうとなかろうと、そんなことは問題じゃない。その人の在り方、全存在が本当に神さまの御意にかなう在り方をしているかどうか。それだけが大事な^{うわべ}上辺ではない、内側だ」

と。まさにキリストが言われたように、「上辺ではない内側だ」ということ。

「山上の垂訓」を^{まじかど}ご覧になりましたら出てきますね。キリストが偽善者に対して、

「彼等は街角の人の多い所で祈って、いかにも信心深そうな姿を見せている。断食する時もいかに辛そうな格好して断食をしている。すべて人に見てもらって、人に誉めてもらいたいということで、ユダヤ人はやっている。あなた方はそうであってはいかん。まず、隠れたところに住んでいらつしやる、隠れたことを見ておられる、そういう神さまに祈る。人の目を外れて、密室にこもって自分で神に祈りなさい」

ということをキリストは言われたでしょ。要するに、人の前ではない。神さまはすべてを御存知だ。その神さまにだけわかるように祈りなさい。

「神さまは、外側ではない、内側を見ておられる」

というのがキリストのお言葉です。それと同じことをパウロはユダヤ人に向かって語りだすわけです。

では、我々にとって、いったい「パウロとは何者か」ということです。我々は異邦人です。異邦人ということは、およそキリスト教とか、ユダヤ教なんてものは——もちろんユダヤ教は関係ありませんけれども——キリスト教ですらよそからやってきた宗教で、外来の宗教である。「外来種は撲滅せよ！」なんていう。琵琶湖なんかでも、外来のヘンテコな魚がいて、ものすごく強くて、内国の本当のやさしい魚を全部食い尽くして絶滅させていく。だから、「外来種をぶっ飛ばせ」というのが日本人の心境にどうしても出てくるわけです。

日本には文化伝統がある。聖徳太子の始め、仏教がやってきた。神道が、儒教がやってきた。いろいろなもので日本というものがある。どこへ行ったらって神社がある。日本は神々で満ちあふれている。そんな所によそからキリスト教が入ってくる。けしからん。尊皇攘夷^{じょうい}みたいなものです。開国か、攘夷か。その攘夷という気持ち^{じょうい}が日本人の心にある。バタ臭いものはいやだと。そういうのが日本人の心にあります。伊勢神宮を見てごらん。実に清楚です。飾り気も何もない。清らかですよ、あれが日本人の心である。あのヨーロッパのバタ臭いキリスト教なんてものは困るという、こういう思いはどなたさまにもあるはずですよ。私が若いときドイツに留学しておりました、向こうの教授と親しくなると、私がキリストのことを滔々^{とうとう}と述べた。そしたら、「お前は日本人ではない」と言われた（笑）。向こうの人も、「日本人とはこんなものだ」と思っている。そういう我々——向こうの人から見たら異民族です——我々から見たら、キリスト教はよその国の宗教。それが実に我々にとっても、



我々のみならず全世界の人にとって、唯一究極の本当の生命を与える、人の道を示してくれる、そういう本ものだということを我々は受けとりたい。受けとってきたわけですね。

ところが、それを今度は日本人の同胞に語るときに、我々は言葉を失うわけです。私はいくらかでも経験してます。大学という所に勤めていますと、やはり皆さんは頭がいいですから、哲学の知識だとか、思想の知識だとか、いろんなものが豊富でしょ。ちよつとやそつとで、「キリスト教を信じてます」なんて言つても、「ふん」と鼻で笑うようなものですよ。

「お前にどんな背景があるのか。お前はどうかやってキリストを信ずるのか。そんな簡単に『救ってください』なんて、たよりないことで簡単にキリストを信じているやつなんか私は信用しない。どんな血みどろな戦いをしてきたのだ。思想的にはどういうふうな根拠付けでこれが優れていると言えるのか」

と、挑戦を受けるわけです。大学という、いわゆる知識人と称する人がうようよしている所で、キリストを告白すると、そうやって挑戦を受ける。学生たちの前で、「私はキリスト者だ」と言うと、ザワザワザワ、ニヤニヤニヤとする。その意は、

「あいつは何だ？ 自主性も何もないじゃないか。キリストとか宗教に頼るとは何と、だらしないやつだ」

と、こういう軽蔑の騷めきが伝わってくる。皆さん、そういう経験をなさいませんか。やつぱり、そういう経験をしてみたら、

「よし、この人たちをギャフンと言わせるような、そんなロジックをしてみせよう」

と思う。「鰯の頭も信仰」とか、片一方では言われている。だから、つまらんものでも信じているでしょ。「牛の頭を撫でたら癒される」とか、やってますでしょ。そういうのがあるかと思うと、そうやって嘲る視線で知識人から見られる。また、自立心の強い学生からは、「何という弱虫か、奥田教授は」という反感です。それに対して、

「理性的にも知性の面でも、これはこんなに素晴らしいことだ」

と、論証することが絶対に必要なんです。そして、何も知識人の中だけでなく、皆さん——隣組というのがあるのかないのかわかりませんが——そういった社交の世界でいらつしやっても、いろんな宗教の人がいますね。京都なんていうのは特に神社仏閣の非常に崇められてる所ですから、そういう所で我々が本当に

「やつぱりクリスチャンはちがうな。クリスチャンは明るいな。どんなことがあつても希望に燃えて輝いているな」

という、その実質をもつて証するのが一つですね。それから、尋ねられた時に、「こうなんですよ」と、わかり易く教えてあげる。まず普通の人なら、聖書を読む気になつて読むでしょ、「さつぱりわからんわ。これなくに!？」と言われる。皆さんだって、いきなり読んだらそうでしょ。いきなり「系図」が出てくるでしょ、マタイ伝の始めに。それでうんざりするでしょ。そのように、聖書というのは百年、中身が変わっていませんから。いや、千



年も変わっていませんから。編纂されて以来、変わらない。それをポーンと出して、

「聖書はベストセラーだから、さあ読みましょう」

と。翻訳はいくらもされていますよ、現代語訳に。でも、中身はちつとも変わっていない。そういう外来種を国産のものにする。それは誰がやるか。我々しかないんです。それを私はここでやっている。京都でやっている。だから、今は小さな種が蒔かれているだけですけれども、これがやがて本当にここから和製キリスト——というのは、キリストはちつとも和製でも何でもない——キリストは洋服を着ることもあれば、羽織袴はかまを付ける格好になるかもしれません。アフリカにいればアフリカ人に相応ふさわしいようなキリストの姿が出てくるでしょう。姿かたちはさまざまであっても、中身は永遠の生命です。これは見えないものです。姿かたちはいろいろありましても、中身というのは隠されているわけです。

隠されている中身をえぐり出し、「これだよ」と言って定義しているのは実はローマ書です。その意味では、ローマ書というのは全世界の人々に対して、キリストとはどんなお方であつて、「キリストを信ずる」というのはどういう中身なのかということを、キリストというお方はどんなお方なのかということを、きちつと論証してくれているのがローマ書なんです。

●宗教は納得の世界

そこで、今回からローマ書を、今日は第1回ということで、ダイジェスト版ですから1章から4章までをお話するわけです。

「宗教は安心立命である、いつも平静な心である」

とよく言います。死を前にしても泰然自若たいぜんじやくとしていて、

「心頭滅却すれば火もまた涼し」

なんて、何か解脱げだつの境地とか、自分自身の平安とか、そういうことが盛んに言われますけれども、人々を救いの世界へ連れてくる、人々と永遠の生命をわかちあうという文化というのは、割合に仏教においてもその他においても、本ものというところではあまり少ない。変てこなものが、もの凄く勢力を伸ばそうとして蔓延はびこっているでしょ。そうすると今度は、

「宗教はいやだ。宗教はごめんだ」

というのが日本人の感覚なんです。変てこな宗教がはびこり、まともなものが静かであつて、己のところだけでじつとしていて。「各人ご勝手に」という。キリストの心はそうじゃない。

「全世界にこの福音を宣べ伝えよ」

と、福音書の終りに出てきましょう。それは何も「征服せよ」ではない。

「本当のものを現せ、本ものを現せ」

というのが、キリストのお心なんです。

「福音書ではこうであつた。使徒行伝ではこうだ。ローマ書にみるとそれはこんなふうに展開している」



ということ、きちんと我々は同胞に自分たちを説明するために——「証し、証し」と言いますけれども結局、言葉によつて——しかも納得というところへもつていけないとだめなんです。宗教はただ「信ずる」だけではない。「納得しました」ということ。学問の世界はそうでしょ、納得でしょ。いろんな説があつても、最後は「やはりこれだ」ということで納得する学問です。

宗教は次元が違う世界です。見えない世界です。この三次元の実験によつて、仮説を立てて実験によつて論証して、「やはりこれだ」ということをやる。そういうことではなくて、見えない世界です。見えない世界のことを知っているのは、見えないところにおられる方だけが知っているわけです。それはキリストでしょ。ヨハネ伝にありますように、

「私は父の御許^{みもと}からやつて来た。私が向こうの世界のことを語つても、あなた方はちつとも信じてくれない。地上のことを自分の見方で話しても、なかなか信じてくれない。いわんや、天上の世界のことを私が話しても、聞いてもらえるはずがないね。」

というのが、ヨハネ伝でのキリストの嘆きですよ。

私は去年の講演におきまして、「神の思いと人の思い」というタイトルで話しました。「神の思い」というのは「人の思い」とはいかに隔絶的に素晴らしいものであるか。しかし、その素晴らしい神の思いというのは、人を救い上げようとしている。神さまの永遠の生命、神さまの本当の輝き、これを我々に与えようとして、向こうから働きかけている。それを我々は拒絶している。拒絶の理由はいろいろあります。我々は、

「向こうの世界の事がわからんから困る。私はそんなものにはすがりたくたくない」というプライドとか。

「私の知識をもつてしたら、そんなものは要らん。そんなものは否定する」という無神論ですね。いろんなそれぞれの方の立場によつて、向こうから差し込んでくる光を拒んでいる。これが人間の姿なんです。

そういったことをもう既に福音書、特にヨハネ伝なんかには明らかにされているけれども、それをパウロは論理でもつて理性に訴えて、論証しているのがこのローマ書です。ローマ書というものを受けたらということ、非常に我々にとっては武器になるんです。人から挑戦を受けた時に受けて立てる。それから、さ迷っている人たちに対して、「ここですよ」という道標^{みちしるべ}ができる。そういうことで、ローマ書というのは非常に、いわば東西を結び合わせる接点といえますか、古代と現代を結び合わせるまた接点、そういうふうな位置づけをすることができる。

●ローマ書の聖書全体の中での位置づけ

ローマ書というのは、聖書全体の中でどういう位置づけをすればいいのかということ、



私なりに纏めてみました。年代的なところからいうと、ローマ書が一番早い。福音書はそのあとで作られている。まず、プリントのほうを読みあげていきます。

《新約聖書「ローマ書」(第1回) レジユメ

2010年7月18日(日) 新宿集会にて 奥田昌道

ー新約聖書の中での『ローマ書』の位置づけ

書かれたのは紀元56年～57年頃かと考えられている。「リントから書き送られた。

パウロは、スペインへ行くつもりで、先ずエルサレムを訪問した後、しばらくローマに滞在する計画を立てていた。『ローマ書』はその準備のために記された(15・22～25、同・28～29参照)。

はじめに四福音書との関係をみておく。マタイ・マルコ・ルカの三福音書は、「共観福音書」と呼ばれる。共通点は、イエス・キリストの伝道活動を時間的順序に従って再現しようとしていることである。

もちろん、書かれた著者の立場によつて時間的前後はいろいろになっている。一つの同じ事件を取り上げるのでも、時間的にはちよつと順序が違つたりもしますが、全体として見たら、イエスが伝道活動を始められてから、そして十字架、復活へ至るまでのことをずつとフォローしている。それがこの三つの福音書なんです。その原型になったのはマルコ福音書だと言われている。マルコというのは、「ヨハネ・マルコ」といまして、ペテロの弟子であつたようです、自分と言ってもいい。自分であつたマルコがペテロの口述をメモして、まとめあげたものがこのマルコ福音書だといわれている。ですから、マルコ福音書というのは簡潔です。しかも、マルコ福音書の終りの三分の二は十字架の場面です。それまでのものは本当に駆け足で書かれている。しかし、非常に大事なものも含んでいるということで、これが原型なんです。

マルコ福音書を原型として、マタイ福音書では旧約聖書(律法と預言書)との対比においてキリストの告知された福音の内容が遙かにそれを越えた深く高い内容のものである。マタイ福音書は、旧約聖書、特に律法と預言書、モーセ五書(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記)とか預言書との対比。キリストの語られたもの、あるいはキリストのなさっている事と旧約聖書とがどういう関係になつていくかということを念頭に置きながら、キリストの福音の内容というものは遙かに旧約聖書を越えた深いものであるということ、キリストの言葉と御業において表しているのがマタイ福音書ということが出来る。

誰に向かつてマタイ福音書は書かれているかという点、「ユダヤ教から改宗してキリスト信者になつた者」というふうに解説書なんかに出てくるけれども、それだけでなくて、やはりユダヤ教徒一般にも——改宗してクリスチャンになつた者に対して、「旧約はこうだ。



しかし新約はこうだ、キリストはこうだ」と言うだけではなくて——やはり、改宗もしていない、しかしユダヤ人に対して「キリストはこう語られている」ということを言っているのではないかと、私は思っています。

ルカになりますと、あまり律法のこととは出てこなくなる。これは異邦人への伝道ということが念頭に置かれています。

ルカ福音書は異邦人への語りかけの面が強く現れていて、旧約聖書との対比はほとんど出てこない。

こういった福音書における性格の違いはありませんでも、共通して言えるのは全部、イエス・キリストはこの世にお生まれになって、このように伝道されて、こういう最期を遂げられたということが書かれている。もつともマルコはいきなり、「イエス・キリストの伝道の始め」というところから始まっています。誕生のことを言っているのは、マタイ伝とルカ伝です。

こうした違いは見られるものの、共通点は、キリストの説かれた福音の内容は、父なる神（天の父）の無条件・絶対の愛と、

「無条件・絶対の愛」これが大事です。

人の側ではそれを無条件に受け取ること（神の愛の体現者はイエスご自身であるから、この方を信じ受け入れること）が救いであることをしめしていることである。

「無条件に受けとる」ということは、神の愛を体で現しておられる方はイエスご自身であるから、結局は、神の無条件絶対の愛を受けとるということは、その体現者、それを体でもつて現しておられるこのイエス・キリストという方を受け入れる。それが救いだということを示している。これが共通点なんです。

しかしながら、そこに現れてくる人たちというのは、いろんな階層の人たちが現れてきます。イエス・キリストを批判する当時の宗教的指導者たち、それから、むしろそういう人たちから爪弾きされて、「あれは罪びとだ、あれは絶対、地獄行きだ」という白い目で見られている人たち。それから、病とかいろんな人間の苦しみを現実には背負ってあえいでいる人たち、いろんな人たちがいます。そのそれぞれの人たちがキリストに対してどんな態度をとっているかということがこの福音書に表れております。

そして、キリストご自身の父なる神への無条件の信従（従順）・平伏しの姿（相）が描かれるとともに、宗教的指導者層（祭司、律法学者、パリサイ人ら）の偽善や律法への固執、そこから来る同胞への愛の欠如が厳しくとがめられている。他方では、イエスは決して律法を否定しておられない。むしろ、その根本精神を尊び、その成就を願っておられる。もつとも重要な掟は何かをめぐる問答において、明確に「心を尽し、精神を尽し、思いを尽し、力を尽して、あなたの神である主を愛すること」と「隣人を自分自身のように愛すること」を示された（マタイ22・34～40、マルコ12・28～34、ルカ10・25～28）。また、「永遠の生命を受け継ぐ道」を求めている問答において、モーセの十戒を挙げて答



えておられる（マタイ19・16～22、マルコ10・17～22、ルカ18・18～23）。
それからまた、

「永遠の生命を受け継ぐには、どんな善いことをしたらいいですか？」

と、尋ねてくる場面があります。金持ちの青年が二つの福音書で出てくる。もうひとつは役人が出てくる。そういった人たちが言っているのは、とにかく、その人たちは律法を守っているつもりなんですけれども、まだまだ自分で本当の喜びも平安もないということ、

「永遠の生命を受け継ぐにはどうしたらいいですか？」

ということを尋ねてきます。その時にもキリストは、尋ねてきた人たちに対して

「律法に何と書いてあるか？」

とまず問うておられる。そこで彼らはモーセの十誡をあげて答えている。あるいは、キリストがモーセの十誡を述べられる。

「それらを全部守ってきました」

「いや、しかし、あなたにはなお欠けているものがなお一つあるね」

と言って、お金持ちの場合だったら、

「そのお金を全部貧しい人たちに差し上げなさい。持ち物の豊かな人はその持ち物売り払って、そのお金を貧しい人にあげて、そしてあなたは私の弟子となつて従ってきなさい。そうしたら、永遠の生命だよ」

と。これでみな三人とも「ギャフン！」と、悲しげに立ち去ったとある。

「金持ちが神の国に入るのはなんと難しいことか」

とキリストは言われた。するとペテロは、

「私はすべてを捨てて、あなたに従ってまいりました」

と、いつもペテロはおつちよこちよいですから、そう言った。

「ああ、そうか、そうか。いいところあるよ」

と、キリストはいつも誉めておられるけれども、でも、

「金持ちが神の国に入るのは難しい。ラクダが針の穴を通るよりも難しい」

と。「針の穴」というのはそういう名の門です。非常に低くて、ラクダはコブがあるから通れない、そのくらいに大変だということを言われた。

「ではいったい、誰が入れるんでしょうか!？」

「人にできないことも神にはできる」

とイエスは答えられました。つまり、人ができないことをやるのが神さまの役割なんだ。人が普通にやってできるなら、神さまはわざわざ現れる必要はないではないか。キリストが遣わされてきたというのは、今までの二千年の旧約の歴史の中でどうにもならんから、最後に切り札として、キリスト・イエスが遣わされた。それを除け者にして、相変わらず「律法、律法」と言っている。しかも、平安がない。キリストに、「あなたは守っているか？」



と言われて、「はい、守っております」と答えているけれども、そういうふうには、「持ち物を捨てろ」と言われたら、「いや、それはとてもできません」と。つまり、形の上では守っている。でも、心は——税金を払うのと一緒みたいですね、なるべく節税とか言って、脱税ではない、節税をやつて、なんとか自分の財産を守ろうとしている——それを全部吐き出しなさいと言われたら、これはとんでもないと。神さまとの関係で、まるで律法は税金みたいな感じになっている。

賽銭箱に献金を捧げているのを見て、キリストは見ておられます。貧しい寡婦^{やもめ}がレプタ二つ——今日の食べ物を買うわずかなお金——それを全部捧げた。願^{がん}をかけたわけですね。命懸けでお願いしないと聞いてもらえないというので、全部出した。そしたら、キリストは見えておられて、

「あの寡婦は他のどんな人たちよりもたくさん献げた。他の人は有り余る、ポケットからちよつと出しただけだ。ところが、あの寡婦は自分自身を献げた。」

これが本当だ」

ということをキリストは言われました。

つまり、律法というものも、みな心から喜んでやっていない。「この辺までやっておいたら、神さまは満足するやろ。この辺でおいとおこう」と、できるだけ少ないほうがよろしい。差し出すのはできるだけ少ないほうがよろしいという、納税意識みたいなものでやっている。それに対して、「すべてを献げます」というのがキリストなんです。自分自身を献げる。「自分の手足を捧げます、ポケットを差し上げます」とかでなくて、己自身を神さまに捧げ切つて、

「御意^{みじこころ}を成してください」

と。これがキリストでした。全然ちがう。

そして、御意は愛ですから、赦しですから。キリストの所にやって来るのは、「もうどうにもならん」という人です。次の所に出てきます。

《要約すれば、キリストにすがりつく以外に救い（罪・咎の重荷、重篤な病の苦しみ、死の恐怖、貧窮のどん底での苦しみの解決）の道を見出し得ない人々にとつては、神の無条件の愛を信受^{みじこころ}し、御意^{みじこころ}に己が身を捧げることが福音であつたのに対し、

そういった人たちがキリストの所へ吸い寄せられてやって来たわけです。この人たちにとっては、キリストというお方にすがりついて、キリストにおいて現れている神さまの愛——「お前は何者だ？」と何も仰らない。「お前は汚れているね」とも仰らない——すべてを無条件で受け入れて、変貌させてくださる。癒してください、赦してください、生命を下さるような、そういうお方にすがったわけです。それが福音だという。それに対して、

律法遵守^{じゆんしゆしゆむね}を旨とし、偽善の中にありながら己を正しき者と自認して他を裁く人たちに
対しては、真の律法の体現の姿を示されたのである。》

そういう者に対しては、キリストは厳しくそれを批判なさっています。本当の律法を生



きるとはどういうことかということを、キリストはご自身の生涯で現されたわけです。

これが三つの福音書の中に現れた神さまの御意と人々の反応ということで、共通点があるかと思えます。それに対して、三つの福音書の、律法という世界の中で人々がうごめいて、ある人は律法でもってキリストを批判する。キリストはまたその批判者たちの偽善を厳しく追及される。そして今度は、神さまの無条件の愛にすぎるしかないという人に対しては、無条件に抱いておられる。そういったドラマが展開しているのが三つの共通の観福音書なんです。そしてどれもこれも、最後はキリストの十字架と復活です。

ヨハネ福音書にきますと、「律法」なんてどこ吹く風という感じです。全く別世界が展開している。ここに書きましたように、

《ヨハネ福音書では、全く様相が異なる。律法遵守による「永遠の生命」の獲得といったことは問題とされていない。

「人は新たに生れなければ、神の国に入ることができない。」

「肉から生れる者は肉であり、霊から生まれる者は霊である。」

「人を活かすものは霊であって、肉は役立たない。私の語った言葉は、霊であり生命である。」

「神は霊であるから、拝する者も霊と真^{まこと}をもって拝さなければならない。」

こんなのがバンバン出てくるわけです。律法の世界の中で格闘していた人間から見たら、これは全くキョトンとする。それがニコデモとの対話でしょ。ニコデモは律法学者です。夜こっそりキリストの所へやって来た。キリストというのはすごいなということは認めていて、

「ちよつとその秘訣を教えてくださいませんか？」

ということやって来た。そしたら、

「人、新たに生れずば、神の国に入ること能わす」

とバーンとやられたから、ニコデモはドギマギしたというのがあのヨハネ伝3章の「ニコデモとの対話」です。

「神はその独り子を賜ったほどに世を愛してくださった。信じる者が滅びないで、永遠の生命を得るためである。」

「神が遣わされた者を信じるのが、神の業^{わざ}である。」《
という。

●信じせしめられる

「律法遵守が神の業だ。神さまが喜んでくださる業だ」

と彼らは信じていた。それに対して、

「神さまから遣わされた者

つまりご自身です、

私を信じるということが、実は神さまに喜ばれる本当の業なんだ」

と。もつと深く言いますと、「信じる」ことすら神さまの助けがなければ信じられないという、人間の側から「信ずる」というのではない。「信じせしめられる」ということ。首根っこを捕まえて

「どうだ、わかったか!」

「はい、まいりました!」

と。これが神の働きによつて、初めて信ぜしめられるのであつて、自分自身から信じるという、人間の主観的なこちらの決意とか決断とかいうものではない。「堅い信仰」とか言いますね、これはまた信仰をサムシングにしている。そうではない。

キリストは空っぽでしょ。神さまの中に自分を明け渡している。「お父ちゃん!」と言つて、抱かれています。抱き抱かれる関係で一つになっていますから、「信じる」という言葉すらもキリストの場合は要らないわけです、現実なんですから。ところが、我々から見たら、神さまというのは遠い遠い存在ですから、「どうやつて信じたらいのか」と。それに対してキリストは、

「だから、私が派遣社員としてやつて来たのではないか。この世に遣わされてやつて来たではないか。見えない遠いあつちの国からやつて来た。」

と。だから、この私(キリスト)を、「あつそうですか、よくおいでくださいました」と言つて迎え入れる。そうしたら、キリストは我々を抱いてくださる。こうやつて抱き抱かれる関係にはいる。これは神さまがそういうように導いてくださる。人間の側で必要なのは飢え渇きです。

「私の中には生命がありません。私の中は暗闇です。自分ではどうにもなりません。どんな行を積んでみても、どんなふうに決意して神さまの御意に合うようにと思つて十誡の精神を守ろうとしても、やはり己というものがあつて、こいつが足を引っ張る。どんなに上に登ろうとしてジャンプしても、またストンと落ちてしまう。九合目まで行つたかと思うと、またストンと落ちてしまう。また登る。これの繰り返しですわ」

と。みんな各人それぞれ思いあたることがあるはずなんです。ところが、ヨハネへ来ますと、神さまがお遣わしになつた方を受け入れる、これが神の業だ。神さまご自身の業であると。「はつ、わかりました!」という、そういう一方的な神さまからの働きかけだけであつて、人間の側で

「何をする、これをする、どんないいことをする、そんなことは問題ではないよ」というのがヨハネ伝の世界なんです。まるで別世界です。

《神はその独り子を賜つたほどに世を愛してくださつた。信じる者が滅びな



いで、永遠の生命を得るためである。」

信ぜしめられる者が滅びないで、永遠の生命をわかし与えていただくんだと。

そして、14～16章では、聖霊・助け主・真理の御霊のことが語られ、このお方に内住していただき、このお方に導かれ、一如となって生きることが御旨にかなう道であることが示されている。》

この「聖霊・助け主・真理の御霊」、これは私はいつも言ってますね、天に戻られたキリストが今度は分身となつて、我々一人びとりの中に宿ってください。ちょうど太陽は一つです。一つの太陽が光線を放っています。光線というのは——私は子どもの時にやりましたよ、黒い紙に虫眼鏡で太陽光線を当てると燃えだす——そのように、太陽光線というのは太陽のいわば一つの分身みたいなもので、働くんです。焼き尽くす火なんです。活かしてくれる。そういう、父の御許にいらつしやる天界のキリストが「自分の分身だよ」と言つて、「聖霊・助け主・真理の御霊」という姿で我々一人びとりの中に宿ってください。私たちと合体してくださる。そうすると、私たちはもはや旧き私たちではない。「人新たに生まれて」いるんです。人新たに生まれて、向こうの聖国との間に親戚関係になったわけです。縁結びをした。

「宗教」という言葉そのものが「レリギオ」「再び結び返す」という。神さまとの間の関係が始めは繋がっていた。それがいつかプツンと切れて、糸の切れた風のようにさまよっていた。ところが、キリストによつてもう一度結び返していただいた。それは、我々が神さまを捕まえたのではなくて、神さまのほうからキリストを遣わして、このお方が私たちのいろんな不信、罪、その他もろもろ、死でさえも全部引き受けた。これが十字架でしょ。全部引き受けて、

「これで終わったよ、もうこれで大丈夫。やるべきことは終わった」

と言つて引き上げてくださった事態が復活という事態。そして今度は、復活して天に帰って、知らん顔ではない。お約束通り、聖霊という姿で我々の中に宿ってください。始めは見える形でイエスというお姿で地上に来てくださった。お仕事をなさつて天に帰られたら、今度は聖霊という姿で再び帰ってくる。そうしたらもう、永遠に離れ給わない。これが十字架・復活・聖霊降臨という事態なんです。そのことがちゃんとヨハネ伝で示されていたわけです。福音書を総じて見ると、こんなふうなことです。そうすると、ローマ書とはどういう関わりがあるかということを見ますと、まず先程来言ってますように、

《成立年代からみれば、『ローマ書』は、57年前後とされているのに対し、マルコ福音書は65～68年頃、マタイ福音書とルカ福音書は80年代、ヨハネ福音書は90～125年頃とされている。》

つまり晩年のヨハネですね、最期はパトモスの島に流されて、黙示録を書く。こういうふうに、福音書のほうがずっと後なんですけれども、パウロが語っているのはいかにもこ



の三つの福音書とヨハネ福音書を全部、彼は見ているかのごとき情況で語っている。これが不思議なんです。

ローマ書は年代的には四つの福音書よりもはるか前に書かれておりながら、内容的にはその三つあるいは四つの福音書を統合して、全世界に向かって、キリストとはこんなお方である、キリストの福音とはこういう内容のものである、ということを訴えている。それがローマ書である。

その名宛人は誰かというところ、ローマにいろいろ散らばっているローマの教会——小さな集まりだったと思います——それがいくつか有ったんでしょう。そういったローマのクリスチャンたちにむかって呼びかけている手紙で、やがて自分はスペインまで旅行しようと思っている。途中ローマに滞在して、あなた方の顔を見たい。そして福音の内容をもっと詳しくあなた方に伝えたい。そのために予め書簡を送って、「これだ。勉強しておきなさい。予習しておきなさい」ということで、送ったのがこの「ローマ書」ということになっています。

●ローマ書第1章

ローマ書のまず第1章から見ます。

《『ローマ書』の特色・内容はこの講演において、順次見て行くこととする。》

Ⅱ 『ローマ書』の内容(要点)

1 第1章

1・1 キリスト・イエスの僕、使徒、福音の使者

1・2～4 福音とはイエスに関するおとずれ(使信)の全体Ⅱイエス・キリストの

全体

1・16 この福音は、すべて信する者に救いを得させる神の力

1・17 神の義は、その福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。》

「キリスト・イエスの僕、召されて使徒となり、神の福音のために選り別れたパウロ——」

この第1章の書き出しは、パウロはかなり気張っていますね。形容詞が多い。張り切りすぎですよ。単純に言いますと要するに、1章の始めで言っているのは、

「私はキリストの僕であつて、キリストから選ばれた者だ。ローマのあなた方に挨拶を送りたい」

と、それだけなんです。自己紹介をするのに、まず「キリスト・イエスの僕^{しもべ}」と言っている。「俺はどんなに偉いやつか」とは言っていない。「キリスト・イエスの僕」という。「僕」とは奴隷なんです。主人の言いなりになる。己が意志を持たない。これが「僕」なんです。パウロの今までの姿と全く逆でしょ。キリスト・イエスに完全に降参しました。言うならば、あの弁慶と牛若丸みたいなものです。



パウロの自覚は今まで、「イエスの野郎!」と思って齒向かっていたのに、完全にあのダマスコ途上の体験によつて打ちのめされて、それ以来ガラツと変わつて、「このお方のためには命も献げます」という姿、これが「僕」です。しかも、「召されて使徒となつた」という。「使徒」というのは神さまの聖言を伝える役目ですから。そういうパウロが、

「⁷われ書を^{ふみ}ロマに在りて神に愛せられ、召されて聖徒となりたる凡ての者に贈る。願わくは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と汝らに在らんことを。」

と言っている。間に入っている言葉は、まず「神の福音のために選出されたパウロ」と言つて、「神の福音」と言つたから、では「福音」とは何かということをまず説明しなければいかん。ローマの人たちは異邦人ですから、いきなり「福音」と言つても、「福音とはそもそも何か」ということで、ここで断り書きが付いてきた。

「²この福音は神その預言者たちにより、聖書の中に預^{あらか}じめ御子に就きて約し給いしものなり。」

神さまは、その預言者たちによつてあの旧約聖書の中で、あらかじめキリストご自身のことを預言し書いておられるんだよ。キリストもヨハネ福音書の中で、

「聖書は我について証したものである」

ということとを5章の中で言つておられます。「旧約聖書は私のことを証言しているんだよ」と言われた。それと同じことを、聖書の中であらかじめ御子キリストのことを約束しておられる。それに関わるのが福音だと。

それでは、「御子というのはどんな人? イエスとは何者?」と。これまたイエスの二重性がある。肉のな、生まれ、素性からしたら、ヨセフの子どもということになる。しかも、ヨセフはダビデの系統ですから、

³御子は肉によれば、ダビデの裔^{すえ}より生れ、

ダビデの裔のヨセフから生まれた。それは素性であつて、外側のこと。内側は、これは凄いと。聖霊によつて身ごもつたというわけですよ。

⁴潔き霊によれば、死人の復活により大能をもて神の子と定められ給えり、

聖霊という、神さまの霊という次元になると、「ダビデの子孫」なんていう外側ではなくて——マリアの誕生のことは出てません——十字架、そして復活されて、神さまはそれをご自分の御許へお引き寄せになつた。このお方が神さまのお遣いで、救い主である何よりの証拠であるという。だいたい、あの弟子たちの伝道の武器はいつも「復活」でした。

「お前たちが十字架に付けて殺したキリストを神さまは甦らせて、あの素晴らしい栄光の姿で皆の前に顕した。この方こそが本当の神のお遣いである。神の御意の体現者であるということとを世に公然と示された。これが何よりの証拠である」



と。復活なくして、キリストを伝えるということはあり得なかった。そのくらい復活というのは大事だった。それは使徒行伝を見ましても、あのペテロたちの証言は全部、復活から始まっている。それはそうでしょ。ユダヤ人たちは「イエスは神に叛逆する怪しからんやつだ、国賊だ」といつて叩き潰したのが、復活させられるとは何事だ。「神さまに叛逆している」と言いつて叩き潰した人間に対して、神さまは

「どつこい、そうじゃないよ。お前たちが間違っている。このイエスこそが私の心に適う方だ。その何よりの証拠は、あの栄光体として顕れているではないか」

と。「お前たち、これが見えないか!」という印籠いんろうですよね(笑)。これがペテロたちの伝道ですから。内的には、聖霊というものが私たちの証です。けれども、人々に証するのに、

「聖霊がうちに居る」

と言つても、わかりません。だから、キリストの復活を言う。復活されたキリストがペテロたちに移つて、ずうつとやつておられますね、あの使徒行伝では。

「金銀は我らにはなし。イエス・キリストの名によつて立て!」

と言つたら、跛者が立つてしまふ。凄いですよ、あそこの世界は。つまり、あのくらいキリストは弟子たちと共に働き給うた。それはそうでしょ。キリストもおめおめと罪人呼ばわりされて、そのまま静まつておられますかいな。目に物見せてくれるといつて、人々を救い上げていつたでしょ。だから、

4 潔き霊によれば、死人の復活により大能をもて神の子と定められ給えり、
即ち我らの主イエス・キリストなり。5 我等その御名の為にもろもろの国人
を信仰に従順ならしめんとて、彼より恩恵と使徒の職とを受けたり。6 汝等
もその中にありてイエス・キリストの有ものとならん為に召されたるなり。」

あなた方もイエス・キリストに帰属する者となるために召されたんですよ、そういう存在なんですよ。始めの挨拶だけでも大変ですよ。これはわからない人に言うんですから。そして、「つつがなきや」に当たるのが、

7 われ書ふみを 로마 に在りて神に愛せられ、召されて聖徒となりたる凡ての者に
贈る。願わくは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜めぐみう恩恵と平
安と汝らに在らんことを。

と。この祈りでご挨拶が終わる。それから言っていることは、

8 汝らの信仰、全世界に言い伝えられたれば、我まず汝ら一同の為にイエス・
キリストによりて我が神に感謝す。9 その御子の福音に於て我が霊をもて事
うる神は、わが絶えず祈のうちに汝らを覚え、10 如何にしてか御意に適い、
いつか汝らに到るべき途みちを得んと、常に冀こいねがうことを我がために証し給うな
り。11 われ汝らを見んことを切に望むは、汝らの堅うせられん為に霊の賜物
を分け与えんとてなり。12 即ち我なんじらの中にありて、互の信仰により相



共に慰められん為なり。¹³ 兄弟よ、我ほかの異邦人の中より得しごとく、汝らの中よりも実を得んとて、^{しばしば}屢次なんじらに往かんとしたれど、今に至りてなお妨げらる、此の事を汝らの知らざるを欲せず。

14節からは大事なパウロの自覚です。これは私たちも同じ自覚を頂きます。

^{えびす}14 我はギリシヤ人にも夷人にも、^{かしこ}智き者にも愚なる者にも^{おろか}負債あり。¹⁵ この故に我は^{はじ}ローマに在る汝らにも福音を宣伝えんことを^{のべつた}頻りに願うなり。¹⁶ 我は

福音を恥とせず、

どなたに対しても自分は負債がある。「負債」というのは借金、払うべきもの。それが福音を宣べ伝えるということなんだ。そしてこの福音というものを私は恥としない。

この「福音を恥とせず」という自覚は大切です。知識人の間では、嘲りの目で見られてしまう。学生たちも嘲りの目で見られるわけです。その中で福音を堂々と弁明することは、「福音を恥とせず」というこの自覚がなかったらできない。「いい格好したい」と思ったら、黙っているに越したことはない。黙っていたら私だって賢そうに見えると思う。ところが、キリストの話をすると、ザワザワザワザワして、「あいつはアホじゃないか」と。

皆さん、会社の中で同僚の間でキリストを告白してごらん。まずは嘲られます。それでひるまないで貫く。「あいつはどこか違うな」と、こうなります。一遍そこで失敗しますと、取り返しがつきません。ちゃんと「私はクリスチャンです」と言うチャンスがある時に、なにかごまかしていると、今度は言いにくくなってくる。言うべき時にちゃんと言わないといけない。言つてバカにされますよ。そこからあと開き直るんです。開き直るだけではない。言つてバカにされたのは、他の人が

「あいつはクリスチャンか。では、クリスチャンらしい生活しているか見てやろう。」

お前、クリスチャンだろ。そんなこと言つていいのか。そんなことしていいのかね」

なんて。これは辛いですよ、本当に。私は引きこもりになりますよ。ひきこもりの心理がわかりますか、皆さん。そこを突き抜けて、破れかぶれで行けるというのは、キリストが、

「私が責任をとるよ」

と、これなんです。

「自分はクリスチャンだから、クリスチャンらしくなければならぬ」

というふうに自分の自覚だけでやりますと、これは引きこもりになる。ところが、

「引きこもらんでいい。お前は私のために恥を負ったではないか。あとは私に任せろ。破れかぶれで行け。私が闘つてやるぞ、心配するな。私が全責任をとる」

と。これが本当の親分の姿でしょ。子分が苦しめられたり、いじめられているのに、黙つて見ている親分なんて信じられません。子どもの喧嘩に親が出ていくのはどうかと言うが、「私は出て行く。許さんぞ」と。

それがローマ書の8章に出てくる。サタンたちは神さまの前に、



「あいつはクリスチャンだと言いますが、まだこんな欠点がありますよ。こんなことをやっていますよ、あいつの思いの中に邪念も潜んでいますよ」

とか言って、いろんなことを訴える。それに対して、キリストは、

「私の十字架で全部、引き受けている。わからんか！」

と言って、立ちをはだかつてくださる。その後に隠れるんです、私たちは。キリストの後に隠れる。それが隠れ家なんです、

「神は我らの避所なり。神は悩める時のいと近き助けなり」

という。隠れたら力が湧いてくる。詩篇46篇です。ルターが闘いの時に抛り所とした。己が力でやったらだめです。クリスチャンになったら、

「クリスチャンだから、立派に振舞わないといけない。模範にならないといけない。」

『汝らは世の光なり』という。ああ、光にならなければ」

と。これは苦しくなる。前よりもつと苦しくなりますよ、相手が神さまだから。

だから、そうじゃない。始めから終りまで、未来永劫にわたって、

「私がお前を守りぬく。お前のために闘ってやる。お前は私の後に隠れて、くっついておれ」

と。子どもがお父ちゃんの背中にくっついてるように、それでいいんだよというのが有り難い福音なんです。

●福音は救を得させる神の力

そして、次がひとつのこのローマ書全体を貫く大事な柱です。

「¹⁶我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、凡て信ずる者に救を得させる神の力たればなり。」

この福音は、ユダヤ人であろうとギリシヤ人であろうと関係ない、すべておよそこの福音を全身で「はい」と受けとること——これが「信ずる」ということです——「はい」と言つてそれに己を明け渡すこと、そういう人に対しては本当の救いを得させてくださる神の力である。福音は神の力である。人の力ではない。福音とは何か。福音とはイエス・キリストに関わる一切、全イエス・キリストと考えてください。「福音音信^{よおとずれ}」というのが福音、「グッド ニュース」です。その内容は何か。

「イエス・キリストをあなたに上げる。このイエス・キリストはあなたのものよ」

というのが福音なんです。ですから、福音とはイエス・キリストに関わる一切。

「福音とはイエス・キリストなり」

と言ってもいい。イエス・キリストはどんな方か。人を救うために来てくれた方。神さまから遣わされた。人を救い上げるために。人間どもを神の子にするために来てくださった。唯一の目的はそれだった。お父さんの所に機嫌よく過ごしていたキリストに、



「お前が行ってこい。地球が可哀相だ。見ておれん。今までいろんなやつを遣わした。みんなだめだった。最後にお前が行ってやってくれ」

「はい、わかりました」

と言って来てくれたのがイエスでしょ。このお方に神さまの愛の御意が体にしみこんでいるわけです。このイエス・キリストという方が福音なんです。このイエス・キリストと福音はイコールなんです。イエス・キリストという喜ばしい音信、これこそが全ての人を救い上げる神の力である。人の力ではない。神の力である。

「人にできないことを神にはできる」

と、キリストは言われました。人は己自身を惜しむ。富もそれを上げることができない。自己保存本能が強い。それを引っくり返す。肉的な人間の思い、自己中心の思いを引っくり返して、本当にキリストと同じ心に、同じ姿に変えてしまう。これは神さまにしかできない相談です。人で片付くことなら、キリストは神さまに遣わされることはない。天の世界で左団扇^{うちわ}でやっておればいい。

「ああ、みんな喜んでやっている。みんな神の心に適うような生活をやってくれて
いるわ。うれしいですね、お父ちゃん」

と、神さまとやっていればいいんですけども、地球上を見たら実に悲惨であります。

いろんな意味で悲惨であります。あの時代だけではない、現代だって悲惨です。そうでしょ。世界各地を見てごらんさない。飢えで死ぬ人がたくさんおります。いろんな所でいろんな破壊が、殺戮^{さつりく}が行われている。人殺しの兵器をたくさん造って、虎視眈々^{こしたんたん}と自分の覇権^{はけん}争いをやってますね、国際社会は。こんなものは神さまの目から見たら到底、御意に適うとは思えないではありませんか。当時はどうだったか知りません、そんな武器も何もなかったでしょうけれども、当時ですら非常に悲惨な状態であった。だから、キリストをお遣わしになった。今はもつともつと悲惨な状態が続いている。ということは、もつともつと本当に我々は、今度は派遣社員となつて——あの時はキリストお独りでした。独りでがんばつてくださった。あの方しかできないことをやってくださった——今度は我々は、キリストの分身が皆さん一人びとりです。分身である証拠は何か。うちに宿っておられる聖霊です。

「私の中にも宿ってくださっているんですか？」

と、皆さん、きつと思われるかもわからない。気がつきませんよ、見えないんだもの。そうでしょ。見えない。でも、御意なんです。キリストは、

「お前の中に宿りたい。依存ないね？」

「はい、依存^{ぞう}ごさいません」

と。それでいい。向こうからのオファーが来ている。こっちがむしり取ったのではない。

「こっちはもうどうにもなりません。助けてください！」

「わかつているよ、わかつているよ。でも、その前に私は十字架を負わなければな



らん。あなたの方のうちなる、神さまに逆らう敵対するような性、このせいだ」
と。この本性が「原罪」と呼ばれているものです。「あの罪、この罪」ではない。

「お前自身、存在そのものが実に神さまとは相容れない、水と油みたいなことになってしまっている。だから、律法の道で神さまの所に行くなんてことは無理だよ」

と言う。ユダヤ人は「律法」を通じてこちら（神さまの所）へ行こうとする。異邦人は律法がないけれども、「良心」がある。それが御意に適えば、神さまの次元に到達するけれども、律法の道ではだめなんです。そこで、神さまは別なルートをそなえた。これがイエス・キリストだった。

イエス・キリストご自身が福音でしょ。福音は神さまの御意の表れです。それを体現しているのがイエス・キリストです。しかも、そのお方は十字架を引き受けてくださった。そして、聖霊であふれていらつしやる。

「¹⁶……この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、凡て信ずる者に救を得さ

する神の力たればなり。」

と。おおよそ信ずる者——民族とかそういう外側ではない——内側で福音を受けようとする人、それにすがりつく者、すがらざるを得ない者には、本当の救い——神さまの永遠の生命、聖国を賜うことです——それを得させる神の力である。福音こそは神の力としてこれを通じて神さまの所へ連れて行つてくださる。これは神わざだということです。福音は人を救い上げる神わざであるということ saying している。

●神の義は福音のうちに顕れた

¹⁷神の義はその福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。

これが大事です。「神の義」という言葉が出てきました。これもしばしば出てくる言葉です。「神の義」は、「神さまの義しさ」と言ってもいい。もちろん、神さまは義しいお方です。でも更に、「神の義」というのは、「神の御意」と受けとつてもらうほうがもっとよくわかる。「神の義は」というのは「神の御意は」ということ。神さまの御意は実に福音の中にあつた。「義」というのは「義しさ」というところで受けとつていきますと——それももちろんよろしいんですよ、義はもちろん神さまの義しさです——これはどうなるか、審きになる。そうでしょ。神さまの義しさから見たら、人間どもはみんな罪人なんです。それには審判による審きが臨まざるを得ないわけです。

ルターはそれで苦しかった。神の義というのは審きの義だと。神さまの前に人は立てない。彼はカトリックの模範僧だった。人から見たら模範的なルターが内心においては——神の義は審きの義で、「義は人を審く」という面が強く出たから——戦々恐々としていた。これは絶対的なんですから、人との比較ではない。

「神さまの前に自分は義しくあるか」



という角度だけで見たら、もう耐えられない。そのときにはもうイエスなんて吹っ飛んでいる。イエスなんて関係ない。神対自分ということで、直^{じか}になりますと、高圧電流に吹っ飛ばされるようなものです。そこに平安はない。和らぎもない。

この審きの義である神の義しきは、実は福音の中に現れた。全く正反対なんです、東と西が遠いように。それにルターは気づいた。「審きの義」だと思っていたのが、実はイエスのここに義が現れている。

だから、そうなりますと、「御意は」ということ。「神の御意」は、ある面では審きになって現れますよ。赦しを求めない者、神さまに逆らっている者に対しては審きになって現れます。ところが、そうではなくて、

「罪びとなる我を憐れみたまえ。私はあなたの前に立てません」

と言っている者に対しては福音を通して「赦し」になってくる。片一方は赦しの福音。根拠は何か。審きは十字架で全部引き受けている。それが根拠です。こっちは、「十字架は要らん。イエスなんか要らん」と言っている。ユダヤ人たちはイエスを殺したわけでしょ。

「俺たちは律法の民、神の民で、そこらの異邦人とは違う。無学の人間とは違うんだ。」

無学の人間は律法を知らない。それだけで罪なんだ」

と言って、律法学者は律法を誇りとしていた。ところが、それが間違いであつたことにパウロは気づいたわけです。

この1章の一番大事なところは、16節と17節です。

「¹⁶……この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、凡て信ずる者に救を得させる神の力たればなり。¹⁷神の義はその福音のうちに顕れ、信仰より出でて

信仰に進ましむ。録して『義人は信仰によりて生くべし』とある如し。」

信仰は、それを受けとるしかない。信仰は「固く信ずる」とか、そんなのではない。

「わかったか!？」

「はい、もう納得です。納得、それ以外に救いはありませんか」

という、そういう形でそれを前端的に受け入れる。己を明け渡すわけです。

「救いを上げるよ」

と言うから、

「はい、いただきます!」

と、オファアを受け入れるわけです。受け入れれば、それに徹していく。そこからはもう己の自己主張なんて出てこなくなる。それがここに言われている「信仰から信仰へ」という姿なんです。これが1章の一番のポイントです。

そこからあと、18節からは実に不思議なことが書かれています。何が不思議かというと、

「だいたい、神さまのことはもう自然万物すべてに表れている。神さまを信じな人というのはおかしなやつだ。神さまがいらっしゃり、神さまの栄光があちらこち



らに表れているのにもかかわらず、神を認めないでそれに逆らっている。これは怪しからん」

というようなことが書かれている。

だから、私が知識人の方々に思う思いとだいぶ違う。「神なんかおるもんか」と、彼らは神を認めないんです。ところが、ここでパウロが取り上げているのは、

18 **それ神の怒は、不義をもて真理を阻む人の、もろもろの不虔と不義とに對**
いて天より顕る。 19 **その故は、神につきて知り得べきことは彼らに顕著なればなり、神これを顕し給えり。**

神さまの怒り、審判は、己の不義、己の出来損ないのゆえに真理が来ているのにその真理を蹴飛ばしている、受け入れようとしない。そういう人に対して、不信仰とか不虔とか不義とかは天に向かって顕れる。つまり、その審きが顕れるよと。なぜかという、彼らはそもそも神さまを知るといことは可能である。知り得べきことは彼らに顕著に顕れている。神さまは顕し給うと。

20 **それ神の見るべからざる永遠の能力と神性とは、造られたる物により世の創より悟りえて明かに見るべければ、彼ら言い遁るる術なし。**

これは本当に私にとつては実に不思議なことです。そんなに簡単に神さまを明らかに見ていると言ってもらったら困るではないかと、そう言いたいんですけれども。しかも、
21 **神を知りつつも尚これを神として崇めず、感謝せず、その念は虚しく、その愚なる心は暗くなれり。**

と言う。それは神の栄光は顕れていますよ。アルプスの山に登ってごらん下さい。

「凄いなあ、これは神さまの創造でなくて何であろうか」

と。自然の素晴らしき美しさに打たれますね。そこに栄光が顕れている。

「野の花を見よ。栄華を極めたるソロモンよりもこの花の一つのほうが素晴らし

しい」

と、キリストはそのように見ておられる。それはみな神さまの栄光の顕れなんです。神の御業の顕れでなくて、どうしてこんな大自然が素晴らしく美しくありえようかと。

大自然の中に神さまの栄光が顕れている。しかし、それは神さまご自身ではない。神さまの栄光の顕れで、神さまの根源的なところは誰も見る事ができない。誰も知ることができない。せいぜい感じるに過ぎないしかできない。しかし、そんなふうに神さまの栄光が顕れても、神さまが本当にいらつしやるのが明らかなのに、それを否定して、

21 **……その念は虚しく、その愚なる心は暗くなれり。**

と、この世の罪がはびこっているということをパウロは言います。偶像崇拜とか、あるいは男女の關係の不自然な姿だとか、それから更にいろいろ言ってますのは、29節からごらん下さい。



29 即ちもろもろの不義・悪・慳貪・悪意にて満つる者、また嫉妬・殺意・紛争・詭計・悪念の溢るる者、³⁰ 讒言する者・誇る者・神に憎まるる者・侮る者・高ぶる者・誇る者・悪事を企つる者・父母に逆う者、³¹ 無知・違約・無情・無慈悲なる者にして、³² かかる事どもを行う者の死罪に当るべき神の定めを知りながら、^{ただ} 自己^{みずから}これらの事を行うのみならず、また人の之を行うを可しとせり。

これらに当てはまった人間はみな死罪だと。義しい神さまは審きの神さまですから、まず一つでも当たつても、もう終りだ。100%それをパスしないと向こうへ行けないよということ saying している。これが1章ですね。

●ローマ書第2章

2章では、主としてこれはユダヤ人を相手に言ってます。

「されば凡て人を審く者よ、なんじ言い遁るる術なし、他の人を審くは、正しく己を罪するなり。人をさばく汝もみずから同じ事を行えばなり。」

ユダヤ人は律法の民ですから、律法を誇る。

「私たちは律法という、異民族の知らないものをモーセ以来頂いた。世界に冠たる民族だ」

という誇りがある。しかも、ユダヤ人の中でもエリートたちです。他のいわば無知文盲の民衆はだめ。いわゆる遊女とか取税人とかそんなものはもつてのほか。自分たちみたいに律法をいただいて、それを大事な宝として守っている。そして、律法違反しているやつは全部切つて捨てる。「これが神の民だと思っている各々方」ときたわけですね。これが「人を審く者よ」ということ。あなた方は弁明の余地はない。人を審きながら、自分たちも同じことをやっているではないかと。

2 かかる事をおこなう者を罪する神の審判は真理に合えりと我らは知る。

3 かかる事をおこなう者を審きて自己^{みずから}これを行う人よ、なんじ神の審判を遁^{のが}れんと思うか。

唯一の道は神さまの仁慈^{なさけ}にすぎること。「悔改^{くいあらため}」というのは方向転換する、「自分たちは間違っておりました」ということを自覚して、そこで神さまの前に降参するということ。それしかないのに、依然としてふんざりかえっている。これではだめだよと。

4 神の仁慈^{なさけ}なんじを悔改^{くいあらため}に導くを知らずして、その仁慈と忍耐と寛容との豊かなるを軽んずるか。⁵ なんじ頑固^{かたくな}と悔改めぬ心により、己のために神の怒を積み、その正しき審判の顕る怒の日に及ぶなり。

神さまの「仁慈と忍耐と寛容」を足蹴にしている。これはもうどうしようもないものだ。むしろ、神さまのそういう「仁慈と忍耐と寛容」を蹴飛ばしているやつは、それだけ逆比



例的に神の審判は強い。怒ったら大変だよというわけですね。

次の6節からは、私は非常に気に入っている。ここから言っていることは、「へえ、ほんと？」と言いたい。何かというと、神さまは外側ではない。「律法があるか、信仰があるか、どんな民族か」、そんなことは関係がない。「どの宗教か」、そんなことは関係ない。その人自身の内心、内側、その人の本質、それを見ておられる。律法があつたって、そんなことは全然だめだ。律法があるなら、律法を重んじ、その根本精神を満たして、本当に御意にかなう。律法を通じて御意に到達する。御意を御意として生きているかどうか。これを生きていたのがイエス・キリストでしょ。御意を御意のままに生きていたのがキリストです。ユダヤ人たちは同じ律法を頂きながら、そこで止まっているわけです。彼らにとつては律法がすべてで、神さまはどこかへ行ってしまったている。律法は、ちゃんと100点取らなければいかなのです、99点ではだめです。そうしたら、「欠点がないか、欠点がないか」とお互いに監視している。「お前には欠点がある」と言つて、互いに欠点を指摘しあつてやっているうちに、もう御本尊の神さまなんてどうでもよくなって、消えてしまっている。それがユダヤ人の姿だということをパウロがここで言っているわけです。

6節から見ますと、

6 神はおのおのの所作しわざに随したがいて報い、7 耐え忍びて善をおこない光栄と尊貴と
朽ちざる事を求むる者には、永遠の生命をもて報い、8 徒党により真理に
従わずして不義にしたがう者には、怒と憤恚いかりとをもて報い給わん。9 すべて
悪をおこなう人には、ユダヤ人を始めギリシヤ人にも患難と苦難とあり。

真理に従わないで不義に従う者には神さまの審判が臨む。おおよそ悪を行う人は、人種、民族、宗教には関係ない。神さまから来る悩みと苦しみがある。我々クリスチャンに臨む試練とは違う。これは神さまのほうから来る、いわば試練、審判としての患難、これが臨んでくる。それに対して、おおよそ善を行う——「善」とは御意に合うことです——人は、

10 凡て善をおこなう人には、ユダヤ人を始めギリシヤ人にも光栄と尊貴と平

安とあらん。

御意に適かなうことを行っている人は、ユダヤ人であろうがギリシヤ人であろうが、ちゃんと誰でも報いを受ける。光栄と尊貴と平安とがある。

「へえ、キリストはどこかへ行つたんですか？」

なんていうわけですね。いや実際、世の中にクリスチャンでも何でもない、特別に宗教も何もない、しかも本当に善良な人がいるんですよ。親切で優しく、よく「仏さまみたいな人」という表現をしますね。いるんですよ。そういう人はそういう人でちゃんと神さまに救われると思います。ここに書いてありますもの。無理やり「クリスチャンでなければいかん」なんて書いてない。

11 そは神には偏り視給うこと無ければなり。



神さまは偏り視給はない。「偏り視る」というのは、外側で判断すること。肌の色で判断なさらない。その人の内面を見ておられる。その人の心の姿を見る。その姿が本当に御意に合うかどうか。

では、「御意とは何でしょうか？」ということになりますと、イエス・キリストの姿を見なさい、これが御意ですよ。イエス・キリストは神さまに対しては——絶対服従というかな——絶対に愛し信じ切っておられるでしょ。神さまの心を心としているのがキリストでしょ。人に対して愛そのものでしょ。審かれない。みんな受け入れておられる。「自分の所に来る者は絶対いだきとつてあげるよ」と、これが御意です。神さまに対しては、絶対に信で従う。人に対しては愛。これが御意なんです。

その姿を、100%とは言いませんけれども、非常にそういう姿に相應しい生き方をしている人は、たとえば無宗教であろうと、その人自身がここ(神さま)に近いわけです。だから、そういう人はちゃんとそれなりに義を受けとる。「あの人は信仰がないからだめだ」なんてことは絶対言わない。それがこの2章の所です。あまりにもクリスチャンは、

「あなたは信仰ありますか？ ない？ だめです、あなたは地獄です。私は信仰がありますから、大丈夫です」

なんて簡単に言うなと私は言いたいですよ。私は割合にかつてそういう冷たいクリスチャンに出会っている。「信仰」というものを何かサムシングにしている。「私には信仰があります。あなたは信仰がない？ だめです、地獄です」と。いや本当の話ですよ、私がまだ大学に残って2、3年の頃です。小池先生に出会う前ですよ。八尾に北欧から宣教師が来ておられて、非常に善良な方でしたが、自信あふれて仰るのに、

「私の住んでいるお隣のお婆さんが昨日亡くなりました。あの人はキリストを信じていませんでした。だから、地獄往きです。気の毒ですね」

と、サラッと言った。私は「なんてことを言う人か」とあきれた。その人たちはそういう教義の中で育っているわけです。宗教団体というのはみなそれぞれ自分の教義を持っています。昔は「使徒信条」というのがありました。

〔註〕「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人の内よりよみがえり、天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこよりきたりて生ける者と死にたる者とを審きたまわん。我は聖霊を信ず、聖なる公同教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだのよみがえり、とこしえの命を信ず。アーメン」(使徒信条)

みなそれぞれの教団、教派というのは、「自分はこれです」というマニフェストを持っていた。その中に生きているわけです。それに従うと、「昨日、お隣のおばあさんが死にました。あの人はキリストを知らないで死にました。だから、地獄へ往きます。お気の毒ですね」



なんていうことを平然と言えるという、そのハート、心情というのは、私にはものすごい違和感をもった。

シュヴァイツァーも言っている。

『主の祈り』は不満足だ。何が不満足か。小さい動物たちのための祈りがない」

と。「付け足しの祈り」というのをシュヴァイツァーは子どものときから付け足した。

「悪しきものから我らをお守りください。それから、小さい動物たちをどうぞお守

りください」

と、プラスアルファを付け加えた。つまり、彼にとつては、人間のことばかり祈っていて、可愛い動物たちのことはちつとも祈っていない。そんなのは嫌だとプロテストした。そのシュヴァイツァーはやがて、いかなる動物をも殺さないという「生命への畏敬」を言った。そこまで私はやれませんが、ゴキブリはいやですし、蚊が自分の血を吸っていたら叩きますし、これが私なんです(笑)。「目には目を、血には血を」をシュヴァイツァーはやらない。だからやはり、福音というものは、宗教に凝り固まったらだめなんです。深い人間性、本当の人間性というものに「なるほど」と言わしてくれるものでないと、我々は納得しませんよね。自分たちの教団の教義に、シュヴァイツァーさんみたにプラスアルファを付け加えたらいい。キリストはきつと「そうだよ!」と言ってくださる。

聖書に出ているのは「かけら」なんです。もつともつと豊かなんです。そのもつともつと豊かなところへ我々は深く導き入れられて行けばいい。その極まるところは、人に対しては愛、神さまに対しては信じ従うという、献げの道です。これなんです。それが、

「心を尽くし思いを尽くし力を尽くして信従して、汝の主なる神を愛せよ。そ

れから、己の隣人を愛せよ。旧約聖書全体はこの二つだ」

とキリストは言われた。ところが、ユダヤ人たちはそこへなかなか到達できなかったというのが現実です。ですから、ここにパウロが、

11 **そは神には偏り視給うこと無ければなり。**

と言う。律法を持たない異邦人は、しかしながら、御意にかなうべき自分自身が律法ではないかと、言っている。律法も何も持っていない、無宗教です。けれども、その人の在り方そのものが、神の御意にピタッと当てはまることを選ぶならば、その人自身がいわゆる律法ではないか。ところが、「律法、律法」と言いながら、現実の姿はまるで常に御意と反している。冷たい。そういう姿というのはまるで神さまの御意とは正反対ではないか、ということをおこなう言っている。

12 **凡そ律法なくして罪を犯したる者は律法なくして滅び、律法ありて罪を犯したる者は律法によりて審かるべし。** 13 **律法を聞くもの神の前に義たるにあらず、律法をおこなう者のみ義とせらるべし。**

この「律法をおこなう」というのは、律法の根本精神を實現する、そこまでのいかないと「律



法を行う」ということにはならない。

¹⁴ 律法を有^もたぬ異邦人、もし本性のまま律法に載せたる所をおこなう時は、律法を有^もたずともおのずから己が律法たるなり。

律法を持たない異邦人が、もしその本性、その姿そのものが御意にかなう姿であり得たとしたなら、その人は自分自身が律法ということになる。問題は人ではありません。自分自身なんです。

次に17節からは、ユダヤ人に対する批判がもういちど出てきます。律法を誇りとして人々を導く教師だと自認しながら、やっていることはなつちやらん。まるでそれと正反対のことをやっている。とんでもないことをやっている、ということがずっと書かれています。

²³ 律法に誇りて律法を破り神を軽んずるか。²⁴ 録して『神の名は汝らの故によりて異邦人の中に潰^{けが}さる』とあるが如し。

むしろ、ユダヤ人が「神、神。律法、律法」と言いながら、やっていることがあまりも偽善であるので、神さまの名前が異邦人の間でおとしめられている。

「口ではこんなことを言っているけれども、やっていることは何だね。あの人たちが信じている神さまなんて大したことないな」

と、こういう形で神さまの聖名がすたる。そして結論として、

「割礼があろうとなかろうと、そんなことは関係ない。律法があろうとなかろうと、そんなことは関係ない。神は心を見給う」

と。それが結論です。29節、

²⁹ 隠^{ひそ}なるユダヤ人はユダヤ人なり、儀文によらず、霊による心の割礼は割礼なり、その誉^{ほまれ}は人よりにあらず、神より来^{きた}るなり。

と言いまして、2章のしめくりは、「内側を見ていらつしやる」ということ、これはさきほどのキリストの言葉と一致するわけです。

「隠^{ひそ}れたるところに在^{いま}す神さまが隠れたところをちゃんと見ておられる。神さまは偏^{かたよ}り視^みるお方ではないよ」

という、あのマタイ伝のキリストの言葉と一致するわけです。

●ローマ書第3章

3章のほうでは、ちょっとそれについてユダヤ人からの文句が出ている。

「ユダヤ人は何の取柄もないのでしょうか？ 私たちは選^{えら}びの民ではなかったのですか。律法をいただいたのに、それは全然だめなんですか」

と。神の言葉を委ねられた。ところが、裏切つたらしようがないではないか。裏切るような相手に神さまが言葉を与えたというのは、神の名がすたる。それは神さまのほうにも罪が、責任があるのではないかと。どんなに御言を与えられたやつがフニャフニャであろうと、



神さまは神さまとして絶対崇められる方である。そういう論証が次の所にあるわけです。その部分は飛ばします。

それでは、ユダヤ人は律法をもらっても、それは全然効き目がない。ではいったい、何かいいところはないのだろうか。なやましいと、こういうわけです。これが9節ですよ。

9 さらに如何ん、我らの勝る所ありや、有ることなし。我ら既にユダヤ人もギリシヤ人もみな罪の下に在りと告げたり。¹⁰ 録して『義人なし、一人だになし、

これは当時の宗教のこの時代の、旧約聖書の言葉を集めて、教会の中で読みあげられていた。いわば一種の「使徒信条」みたいなものです。詩篇の中からも取られていた。それが以下に引用として表れた。

¹¹ 聴き者なく、神を求むる者なし。¹² みな迷いて相共に空しくなれり、善をなす者なし、一人だになし。

さらにそこから先のことは、読んでいても驚くような厳しいことが書かれている。若干誇張があると思いますが、当たらずといえども遠からず。これが人間の姿だ言うわけです。

そして、19節に行きますと、要は、律法はユダヤ人に語られている。律法というものを通して、いかに人間というものが——ユダヤ人ですね——律法をいただいて、律法を誇りとして、神の御意にかなうことを求めたはずなのに、やっていることは全部落第だと。神さまの前に屈伏しろと。そういうことを言っているんだというのが19節です。

¹⁹ それ律法の言うところは律法の下にある者に語ると我らは知る、

「律法の下にある者」すなわちユダヤ人に語られている。ユダヤ人たちは全世界の民族のいわば選ばれたチャンピオンである。そのチャンピオンがこんなざまならば、全部がだめだ。ユダヤ人はチャンピオンとして選ばれた。そして訓練をされた。けれども結局だめだった。ということ、他の民族だつて同じことではないだろうか。

これは凡ての口ふさがり、神の審判に全世界の服せん為なり。²⁰ 律法の行為によりては、一人だに神のまえに義とせられず、律法によりて罪は知らるるなり。

律法の道を通しては、律法のこのルートを通しては、誰も神さまの御意にかなうことはできない。では、律法は何の役目をしているか。いかに人間がだめかということを知らせるため。律法がなければ、基準がないわけです。刑法というものが、すべて罪はこういう根拠で罪である。その罪に対してはこういう罰がある。「罪刑法定主義」と言っている。ヒットラーのときは違う。ヒットラーの気に入らないことは全部だめ。ヒットラーが基準。独裁者の思いに反することは全部だめなんです。

それに対して近代刑法というのは、始めから「こういうものはだめだよ」と、罪のパター



ンを決めておいて、「これに反したからあなたはだめだ。審きます」と、こうなる。律法というものがなければ、そこはウヤムヤに終わってしまう。「貪るな」という律法があつて初めて、「貪るとは何なのか。私は貪っているか。やっぱり貪ってるな」とか、そこから自己義認が始まるわけです。それまでは眠っている。貪ろうが何しようが、そんなことは自覚しない。ところが、律法というものは、これに嵌^はまつたら出られない。審かれる。嵌まっているかどうか調べるわけです。そしたら、

「今まで貪りなんか知らなかったのに、貪りの心が起こってきた」と、そういうことを7章で言っている。

要するに、モーセを通して、ユダヤ人がひとつの代表選手となつて神さまの前に出た。モーセというのは素晴らしかった。これが律法をいただいた。それがだんだん広がっていきました。レビ記、申命記と。モーセの十誡には出てきませんよ、あの

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして……」

というのは。これは申命記に出てきます。

「己の如く隣人を愛せよ」

というのはレビ記に出てきます。モーセ五書の中に出てくる。旧約聖書の特にモーセ五書の全体を「律法」と呼んでいる。つまり、彼らの宗教規範です。

ユダヤ人にとつては、宗教規範は二つある。自分たちの行動規範。人間としていかに生きるべきか、隣人に対してどう振舞うべきかという行動規範。それから、祭り、祭儀、何を着てどうやってという、これはどこの宗教にもあるわけです。結婚式などで牧師が祭儀用の服を着るのは、つまり、それは通常の間人ではなくて、別の立場に立っているというこのシンボルです。そういう祭儀に関する細かな規定が出ているのがレビ記です。レビ記なんかを読んだら、うんざりしますね。それはユダヤ人にとつては当然だったのでしょう。末代までもこの宗教を守っていくためには、祭儀の内容をこと細かに定めている。

これはキリストにおいては全部無くなつたとヘブル書に出てくる。こういうものはキリストが出てくるまでの仮のもので、キリストがおおいでになったら、もう要らなくなる。それからもう一つのほうが行為規範です。相手は神さまであり、また人である。「神に対してはどう、人に対してはどう」と。この在り方が行為規範で、これは我々にも関わりが深い。このルート（律法の道）ではすべて人間は落第だということがはつきりわかってきた。それでは、どうすれば救われるのか。それで大事なところが次の21節です。決定的に大事なところですよ。

「²¹然るに今や^{おきて}律法

つまり旧約聖書の行為規範のすべてです。

の外に^{ほか}神の義は顕れたり、

本来、神さまの御意は律法というものにおいて顕れていたはずだった。律法は神さまの御



意の具体化だった。モーセがシナイ山でもらってきたんですから。本来、律法というのは神さまの御意が書かれた文字として、これは成文法規だった。その成文法規でわかったことは、みんな落第生だということばかりが現れてきて、マイナス面ばかりが表に出てきた。人間はシュンとならざるをえない。ユダヤ人はシュンとならないで、ふんぞりかえっている。「私たちは律法の民だ」と言つて、ふんぞり返っている。それはちがうということです。では、この道でだめなんだつたら、どうするの？と。律法なき形で行く道もあるけれども、これも結局はだめなんです。人間は、そんな己を否定して神さまに喜ばれる姿に生きるなんていうのは、イエスというお方を除いてはありえない。だから、この二つとも、

「律法を通して御意を成就する」

「律法はないけれども、その人自身が御意の体现者として神さまに対する」

これはすべて自分から出発する。己という自己から出発する。自分の良さ、自分の努力、自分の立派さ、自分の力、これをスタートの基礎にして、上へ上へのぼっていく。自己を研鑽して積み上げていく。これ自身は尊いんですよ。子どもさんたちはそれでなくてはいけない。いきなり、この福音の道を言つたら、子どもはフニャフニャになります。少なくとも大学を終わるくらいまでは、

「努力しろ、努力しろ。己に厳しくなれ。そんなことでへたばつたらどうするんだ」

と。一応、努力精進させる。やはり「己の限界を知る」ということは大事なんです。そこで、

「私はだめですわ」

と言つてきたら、

「いや、大丈夫、大丈夫。神さまは別の道を用意してくれている。これ（キリストの道）が隠されていたんだよ。隠し玉があつたんだよ」

と。これをここで言っている。

21 然るに今や律法の外に神の義は顕れたり、

と。「神の義」、神の御意、これが今まではここで切れて、律法の世界という中で閉じこもっていた。その中でもがいていた。「人間は努力精進して」という、モーセのところでもまた申命記のところにも、

「この律法の道を守っていくなら、あなた方は祝福される。律法に背くなら、

あなた方は滅びる」

とある。「祝福される」というのはこの世的に祝福されることで、子孫が増える。

「乳と蜜が流れるカナンの地であな方は民族的に繁栄する」

とか言う。要するに、この世的な祝福なんですけれども、それが

「律法を重んずるならば祝福される」

というのが、モーセに与えられた。それがだんだん内分化されていくわけですけども。そういう鎖された世界だということを言いたくて、前置きのところで、ヨハネを除くあの



三つの福音書は結局、律法に対してキリストと敵対者たちとの戦いがあった。それから、彼等によって弾劾されている哀れな民衆はキリストの所へ吸い寄せられた。そういう姿が描かれていると思う。

そして、「別の道」はヨハネの世界です。これはまるで様相がちがう。

「人^{あら}新たに生まれずば」

とか、

「永遠の生命を与える、これが神さまの御意だ。神はその独り子を賜ったほどに世を愛してくださる。一人も滅びないで、永遠の生命を得るためである」

と。全然、「律法」のことなんか出てこない。

「こんなものは別世界だ。こんなものは何なんだ!」

というような形で表しているのがヨハネだった。そのヨハネの世界をパウロは知ってか知らずか、ここでは、

「今や律法^{おきて}の外に神の義は顕^ほれたり」

御意が現れた。これはイエス・キリストという方を通して現れた。しかも、イエス・キリストを戴くという、功^{いさお}なくして、自分に何の根拠もなく無条件に、神さまは

「お前を救いたい。お前を素晴らしい人間に変えたい、救い上げたい。苦しんでいてほしくない。死でもって終わりではない。死を突破して本当の世界にあなたを導き入れる、私はその突破口を開いた」

と。このキリストという方は当然に向こう(天国)へ行く方ですね。それがあの苦しみをなさったというのは、

「お前さんたちはそのままでは、この審判の義に耐え得ない。そういう義人は一人もなし。それに対して私は自分が十字架でその分を引き受けた。その審きを受け

たんだ、十字架で。」

キリストは、悪くて審かれたのではないでしょ。十字架は、神さまの目から見たら、人々が神の前に立てなくて審かれるほかない。永遠の死に落ち込んでいく、それを阻止したい。それには、

「気の毒だけでも、お前がこれを引き受けてやってほしい」

と。義しい神さまは無条件に赦すことができない。フニヤフニヤになりますから。義しさが貫かれれば、審きとなつて顕れる。その審きの部分をイエスが十字架で引き受けた。そして、引き受けられて、我々は何をいただくか。キリストが本来いただくはずの「永遠の生命を上げる」と言う。まるで血液交換みたいなものです。黄疸なんかで生まれると、その赤ちゃんの血を全部、まともな血で入れ換えましょ。そういう形で、我々の本来、神さまに逆らう——「原罪」という——神に逆らうという人間の性^{さが}をキリストは全部引き受けて、

「あの十字架においてあなたの罪は審かれた。私が引き受けている。その何よりの



証拠に、私は復活しているではないか。あれは死につばなしではだめなんだ。やはり復活されたということで、神さまはそこで勝ったぞ!」

ということ。神の愛は勝ったぞ、神の義は勝ったぞと。

「罪だ、審きだ」といつて、人間は滅びることはない。キリストが全部それを引き受けてくれた。この宣言を明らかにするために、二千年の歴史があつたと言つても過言ではない。アブラハムに祝福が与えられた。それから430年経つて、モーセに律法が与えられる。そして人間はまた不信になる。最後にキリストが現れる。そして、人間の罪の総決算をしてくれたのが十字架・復活、そして聖霊が与えられる。これが神さまの側の勝利です。これを表しているのがこの21節からなんです。

「²¹然るに今や律法の外に神の義は顕れたり。これ律法と預言者とに由りて証^{あかし}せられ、

「律法と預言者」、つまり旧約聖書全体によつて証言されていた。

²²イエス・キリストを信ずるに由りて凡て信ずる者に与えたもう神の義なり。之には何等の差別あるなし。」

イエスというお方が福音ですね、これをそのまま無条件に受け入れる。無条件の愛を無条件に受け入れる。神さまの側は無条件に愛してくださるのに、こつちも条件を付けてはいけない。全面的降伏、無条件降伏です、神さまの前でも、キリストの前でも。神さまの前に、

「はいっ、もう義理立てもいたしません。いろんな抗弁もあるかもしれませんが、全部断ち切ります。何も言いません」

と。「無条件に江戸城を明け渡します」という、これが無血革命になつたわけでしょ。だから、私達と神さまの間のいわば戦争が終わった。それをパウロが「和解」という表現をしていますね、コリント人への書簡の中で。

「神さまと人間との間の敵対関係がキリストの十字架によつて和解させられた」

と言っている。ユダヤ人にとっては、「審判^{さばき}」ということを言いますけれども、異邦人にとっては、あまり「審判」ということをパウロは言わない。むしろ、「我らが敵対していたのを和解させてくださった」という言い方をしている。

このように、イエス・キリストを信じ受けとることをとおして、そういう者に与えてくださる「神の義」であるという。神の義は審判ではなくて、こちらのほうに流れてきて、イエス・キリストの福音において神の義が顕れた。さっきの1章にありましたね。

「¹⁶……この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、凡て信ずる者に救を得させる神の力たればなり。¹⁷神の義はその福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。」



と。この福音こそは、人を救いに導く神の力であると。何の人種的な差別はない。

「²³凡ての人、罪を犯したれば神の栄光を受くるに足らず、²⁴功^{いさお}なくして神の恩恵^{めぐみ}により、

「恩恵」というものの対立概念は「報酬」という。報酬というのは、それなりの根拠があつて、それに相応しいことをやっている人に対して、報酬が与えられる。報酬を与えられたからといって、何も卑屈になることはない。それだけのことをやったんだから。自分がやった立派さに対する褒賞、これが報酬です。あるいは働いたことに対する支払い、賃金、これが報酬です。

それに対して「恵み」というのは、こちらはゼロなんです、何もない。それに価するものが何もないのに、それ以上のものが与えられる。全然価しないものに無条件に、予期せざる素晴らしいものがプレゼントとして与えられる。これが「恩恵」なんです、プレゼントです。

キリスト・イエスにある贖罪^{あがない}によりて義とせらるるなり。

「キリスト・イエスにある贖罪^{あがない}」とは十字架です。それによつて神さまはご自分にお受け入れくださる。「義とせられる」ということは、「受け入れていただく」ということ。「神の義としてくださる」ということは、神が受け入れてくださるということ。

²⁵即ち神は忍耐をもて過^{すぎ}来しかたの罪を見遁し給いしが、己の義を顕さんとて、

神は忍耐をもつてこれまでの罪を見逃してきてくださったんだけれども、今やご自分が義しいお方であるということをはつきり示す。これは不義に対しては、審判というものが臨むという、神さまの厳しさの面、それが「神の義」でしょ。それを顕す。そのためにキリスト・イエスをお使いになる。

キリストを立て、その血によりて信仰によれる宥^{なだめ}の供物^{そなえもの}となし給えり。

キリストをお立てになつて、その十字架の血潮によつて、この赦しを受けとりなされた。そういう、いわば犠牲^{いけにえ}として、祭壇の献物^{さといげもの}としてくださった。

こういう言い方をしますのはやはり、ユダヤの宗教というのは犠牲の宗教なんですね。何かあると犠牲を捧げる。彼等はやはり遊牧の民ですから、動物を屠るというのは何でもなかったのかわかりませんが。とにかく犠牲の献物をやっています。

アブラハムは、

「息子^こを、イサクを献^{ささ}げろ」

と言われた(創世記22章)。彼は苦しかったと思いますよ。25年待ち続けて与えられた息子なんです。自分は100歳、奥さんは90歳のときに与えられた。それを、こともあろうに、イサクが少年に達したときに、「犠牲として息子^こを献^{ささ}げろ」と言われた。アブラハムは誰にも相談できません。サウにも言えません。子どもにも言えない。「わかりました」と、それだけ



言って、夜明けにイサクを連れて出発する。子どもは、

「お父さん、どこへ行くんですか？」

「これからモリアの山の祭壇に献物を献げに行く」

「ああ、そうですか。ところで、お父さん、献物をお持ちではありませんが、どうするんですか？」

「それは神さまが備えてくださるよ」

そして、目的地に着いたら、やにわにイサクを縛りあげる。イサクはびっくりしたでしようね。縛りあげて祭壇に献げようとして、刃を向けて殺そうとした時に、

「待て！」

と。意地悪な神さまですね。そう言いたいですよ、本当に(笑)。あれがアブラハムの信仰上の最大の試練です。神さまは、

「そこまで私に己を献げたか」

と。子どもを献げるということは自分を献げることの最たるものです。「子どもの代りに私を献げ物にしてください」と言いたいのが、本当の親の心ですよ。それを、御言に従ってイサクを献げようとした。それがアブラハムの信仰の真骨頂です。「信仰の父」といわれる。その部分だけは私は受けとる。神さまがアブラハムに、

「空の星を見てごらん。お前の子孫はあの空の星のように増え広がるよ。どう

だ、うれしいか」

「はあ、凄いですな。はい、わかりました」

と。これはいい。出血しないんですもの。いい約束だけど、信じがたい約束だけれども、「はい」と受け入れた。これが、

「アブラハム、エホバを信す。エホバ、これを彼の義と認め給えり」

という、創世記15章に出てくるところが非常に強調されていますけれども、私はあそこよりも、イサクを献げたところに本当のアブラハムの信があったと思う。

というのは、あのあとアブラハムはやはり躓いているんですよ、この4章にアブラハムのことが出てきますけれども。とにかく25年もかかっていますから、アブラハムはやはりいろんな所へ行くわけです。奥さんが美しかったから、夫である自分が殺されて奥さんを横取りされてはいかんから、「私の妹です」と偽ってみたりした。……………

創世記の中のアブラハムを見ると、そんなに立派な者ではない。人間の弱さをやはり持っています。けれども、彼は25年間にわたって神さまに従おうとしていた。その最後が、イサクを献げるところに極まった。私はそう思っている。

3章の残りのところにいきます。要するに、ここにおいて別の道が現れた。もう律法でもなければ、人間の側の行為でもない。人間の立派さでもない。いわゆる信仰でもない。これは、神さまが恵みによって人を受け入れてくださる。しかも、義なる神さまが受け入れるには、



それなりの理屈がなければならない。理ことわりがなければならない。審判さばきというものをどうしてくれるのかと。

その審判という問題をイエスご自身が十字架で全部引き受けてくださった。これで神さまの義は立った。義しい神さまの義しさがそこで満たされた。それから、全人類を救いたいという神さまの愛の御意もそこで成就した。つまり、いちばん貧乏くじを引いたのがイエスだった。そうでしょ。世の中でこれほどの貧乏くじはない。

皆さん、自分のいろんなことでご不満があるかもしれないけれども、いろいろな人と比べて自分はこんなに不幸だと言うけれども、イエスという人ほど哀れな人はありませんよ、人間的に見ても。あれほど孝行息子のイエスは、父親の神さまに対して逆らったことがない。

「すべて御意みこころのままに」

とやっている。御意は、

「人を赦してやれ、癒してやれ、生命を与えてやれ」

という。三年間、奇蹟の御業をバンバンなされたでしょ。全部、父がなさった。

「私を通して父が働いておられる」

とキリストは言っておられた。そのキリストが最後に十字架にかかった。「なんでやねん!?」と言いたい。

「あの人たちは、いくら私が御業を顕そうとも、何をしようとも、結局はついて来てくれませんでした」

「だから、お前に十字架にかかってほしい」

「そこまでやるんですか!? そこまでですか、……仕方がない、わかりました」

というのがゲッセマネの祈りでしょ。義しい神さまが、義しいキリストをなぜ十字架に付けるんですか。

「義しい神さまが義しさを貫くならば、私が三年間、身を粉にして働いて、神のさまの御意を伝えた業、私の全存在をとおして誰に対してもはつきりと御意を顕した。それでも受けとらないなら、審判を勝手に受けさせたらいいじゃないですか」

と、私なら逆に思いますね。「いったい何がご不満なんですか!?」と、親父に対してそのくらい言いたくなりますよ、普通は。それが、

「わかりました。御意がそれだったら、従います」

と。こんな孝行息子は、世の中を探したっておりませんわ。たいていは悪態をついて「私は死ぬ!」と言うくらいが普通ですよ。それが、

「8……己ひくを卑ひくうして死に至るまで、十字架の死に至るまで順したがい給えり。

9 この故に神は彼を高く上げて、之に諸般もろもろの名にまさる名を賜いたり。」(ピリ
ピ2・8～9)

とピリピ書にある。これが神さまの理です。納得ということ。



律法の道ではなく、自分からスタートすることをやめて、神さまが恵みをもってキリストをとおして救おうとなさっている、その御意に前面的に従おうではないか。ユダヤ人もギリシア人も区別はない、善人も悪人もない。程度問題だと。神さまという高次元のお方から見たら、人間はキリストというお方にすぎるしかない。神の義は実にこのイエスにおいて顕れた。それをこの3章が言っているわけです。

「²⁸我らはどう、人の義とせらるるは、律法の行為によらず、信仰に由るなり。」

(ロマ3:28)

「人が義とせられる」、つまり、神さまに受け入れていただくのは、「律法の行為」という自分から出発した善さではなくて、イエス・キリストを受け入れることしかない。しかも、そうすることこそが、本当にこの律法をとおして神さまが達成しようとなさった御意を全うすることになる。イエスを見てごらん。イエスは律法を否定しておられない。律法をとおして律法の上へ行かれた。律法というものを乗り越えて、本当の根源なる神さまご自身と一つになったわけです。

ところが、普通の人間はそこまで行かない。そこで止まっている。だから、キリストは律法をつぶしたのではない。律法の本当の姿を顕した。ところが、本当の姿を顕したキリストを、人間どもは十字架につけて殺した。そこに罪が極まった。しかも、そういう罪に対して審判をもって臨むのではなくて、救いをもってした。キリストが本来受けとるべき永遠の生命、復活の生命、あの豊かな生命を万人に与える。

「ばらまき」ですな、本当に「ばらまき」ですよ。財源は十字架です。これが我々の理性をちゃんと納得させる論理だと思えます。何でもかんでも訳わからずにただ信ずるのではないんです、我々のは。ちゃんとそこに神さまのことわりがある。真理の神さまは真理に反することはなさらない。学者は真理を重んじます、学問的な。

もうひとつ別の世界の神さまの真理、神さまのことわり——神さまの法、「神法」です——神法がこういう姿でキリストによって顕れている。だから、「神の義」というのは、神さまの義しさであり、神の法であり、神の御意である。それは福音の中に顕れた。それは審判の義ではなくて、人を救い上げる神の力であると。これがこの3章までのところで言っていることです。

●ローマ書第4章

あと、4章はつけたしです、はつきり言いまして。簡単に4章をみますと、まず始めにアブラハムのことが出てきます。

「³聖書に何と云えるか『アブラハム神を信ず、その信仰を義と認められたり』と。」

これはさっきの創世記17章6節です。その時にアブラハムは受け入れていただいた。そ



れから、報酬と恩恵のことが出てきます。

ダビデはどうだったか。ダビデは罪を犯しましたよ。ダビデは素晴らしい王様だったけれども、罪を犯した。自分の忠実な部下のウリヤを戦死させて、その妻（バテシバ、サムエル記11章）を奪った。

「⁴それ働く者への報酬は恩恵といわず、負債と認めらる。⁵されど働く事なくとも、敬虔ならぬ者を義としたもう神を信する者は、その信仰を義と認めらるなり。⁶ダビデもまた行為なくして神に義と認めらるる人の幸福につきて斯く云えり。曰く、⁷『不法を免され、罪を蔽われたる者は幸福なるかな、

⁸主が罪を認め給わぬ人は幸福なるかな』」（ロマ4・3～8）

と。栄光のダビデだからではない。彼は自分がとんでもない罪を犯してしまった。しかも、それをなお赦し給う。ここで大事なところに到達した。栄光のダビデではなかった。もう罪を犯して、その罪の審きとしてその後さんざんな目に合う。しかしながら、

「不法を免され、罪を蔽われたる者は幸福なるかな、主が罪を認め給わぬ人は

幸福なるかな」

と。これはもっぱら赦しの福音ですね。審きの福音ではなくて、罪を覆ってください。それが十字架だった。十字架は我々の罪を認めないで全部洗い流してください。それを引いているわけです。

それからまたアブラハムは、あの祝福を受けたのは「割礼」を受ける前だった。アブラハムが割礼を受けていない姿のときに、神さまを信じて、そして義と認められた。そして、その結果として、お前の民族が祝福される、その印を体に付けなくてはいけない。それで割礼ということになった。体に割礼を受けるといことは、生涯、お前は神の民としての証印を押されたということ。それはアブラハムが祝福を受けた結果なんです。割礼を受けたから祝福されたのではない。割礼を受けたから義とされたのではない。信じて義とされたその結果としてやる、それが割礼です。そんな割礼のあるなしが問題ではない。問題は本当のユダヤ人、つまり神の民であるかどうかということだけです。

ではいったい、律法というのはどういうことになるのか。アブラハムから430年後にモーセというのが現れて出エジプトをした。そして、シナイ山で律法をいただいた。それから律法がだんだん広がっていくわけです。ユダヤの民衆の行動規範、行為規範と祭儀規範です。その「律法」は何のためにあるのか。それはいかに人間は律法によらなければ救われないかということを示すためだということをここで言います。そしてまたアブラハムのところからきまして、アブラハムは、

「¹⁸彼は望むべくもあらぬ時になお望みて信じたり、是なんじの裔はかくの如くなるべし」と言い給いに随いて、多くの国人の父とならん為なりき。¹⁹
かくて凡そ百歳に及びて己が身の死にたるがごとき状なると、サラの胎の死



にたるが如きとを認むれども、その信仰よわらず、²⁰不信をもて神の約束を疑わず、信仰により強くなりて神に栄光を帰し、²¹その約し給えることを、成し得給うと確信せり。²²之に由りて其の信仰を義と認められたり。」

ここではイサクを産むことは出てきていません。イサクの前までのことしか出てきませんけれども、イサクのことはヘブル書11章17節のところに出てきます。

「¹⁷信仰に由りてアブラハムは試みられし時イサクを献げたり、彼は約束を喜び受けし者なるに、その独子^{ひとりご}を献げたり。¹⁸彼に対しては『イサクより出ざる者なんじの裔と称えらるべし』と云い給いしなり。」

「イサクを献げろ」ということは結局、「神は、イサクを献げてイサクは死んでも、これを復活させてまた返してください」と、そう信じたんだろうと解釈している。

¹⁹かれ思えらく、神は死人の中より之を甦えらすることを得給うと、乃ち死より之を受けしが如くなりき。」(ヘブル11・17～18)

と言っている。ヤコブ書の中では、

「信仰とは何か。信ずるといふのは頭の問題ではない。行動だ。アブラハムを見る。イサクを献げたではないか。行動となつて現れているところに信仰の真骨頂がある」

とヤコブは言う。それとはちがつて、

「お前の子孫は星のごとく増えるよ」

「はい、わかりました」

これも信仰だという。それからまた、

「イサクを献げろ」

「はい、わかりました」

と。これも信仰。すべて神さまに対して、それが自分の有利・不利にかかわらず、御言や御意に「はいっ」と従う。これが信仰という。これは人間の肉からは出てきませんよ。

私に言わせれば、キリストが内についてくださって、「大丈夫だよ、大丈夫だよ」と絶えず励ましてくださらないと、こんなものは出てきません。だから、キリストぬきに、御霊ぬきでただ「信仰、信仰」と言っているのはあぶない。「信仰」を何ものかにしている。信仰がやはり律法の代わりになっている。その信仰によって人を審く。

「私は信仰がありますから、天国に行きます。あの人は信仰がないから、地獄行きです」

こういうふうには、冷たい人間になる。「クリスチャンだけが救われる」という。それがだめなんです。どこまでも、信ぜしめていただく。だから、要するに、人間の力からは出ないんです。「信仰」などと言っても、それは神さまの恵みの賜物である。「信ぜしめられる」と言いました。



「神の業^{わざ}とは神の遣わし給うた者を信ずる是なり」

と。しかも、「信ぜしめられる」のであって、どこまでも人間は受け身です。神が働き給う。神が御業を為し給うんです。それを「はい」と受けとるだけです。そして、「従っていく」ということも神さまの御力に支えられて従っていく。自分の強さで従っていくのではない。徹頭徹尾、一から終りまですべてが、アルファからオメガまで、今やキリスト、主様が私を捕まえて御意になうように歩ませてくださる。「これがあなたの歩むべき道だよ」と言う。

「我は道なり、真理なり、生命なり」

と、キリストは仰いました。だから、あなた方一人ひとりみんな路^{みち}はちがうはずだ。一人ひとりちがう路だと。

「すべてが御意になうように私が導いてあげるよ」

と。だから、一律に、「クリスチャンはかくあらねばならない」とか、そういう規律でがんじがらめに縛りあげるような、そんなケチ臭い信仰ではないんです。一人ひとりが自由のびのびと、

「本当に自由にのびのびと、あばれなさい！ 責任は私がとってあげるから。その代り、私に対しては逆らうんじゃないよ」

と、そういうふにしていくな。非常に人間的でしょ、私の言っていますことは。本当に自分を大事にしてくれる人に対しては、従いたいではありませんか。それが人情というものですよ。ましてや、自分のためにこんな知らない所で十字架を受けとって死んでくださった。そして復活して、永遠の生命のご自分の質を、内実を、「生命を無条件で上げる」と言ってくださった。こんなプレゼント、こんな素晴らしいものがありましょうか、というのが福音であるということです。

ローマ書4章の最後のところを見てください。アブラハムのことをずっと言ってきました、24節に、

「²⁴我らの主イエスを死人の中より甦えらせ給いし者を信ずる我らも、その信仰を義と認められん。

我らの主イエスを死人の中より甦えらせてくださった、そのお方を信ずる私達も、そういうふうにして、イエス・キリストを受けとるということが御意に適う道である。そして、

²⁵主は我らの罪のために付^{わた}され、我らの義とせられん為に甦えらせられ給えるなり。

主は我らの罪のためにわたされて——十字架です——我らの義とせられんために甦ってくださった。復活です。だから、十字架で罪は赦された。我々の罪が原因となったのが十字架であった。そして復活という姿においても審きは終わったという、神さまの側からの証明書なんです、復活は。

「あなた方は自分の罪のことで苦しまなくてよろしい。もうそれは過ぎ去った」



と。台風一過、秋晴れ。空気は澄んでいる。太陽は輝いている。キリストはいつまでも十字架で血を流しておられない。今は輝いてくださっている。太陽の光の中に輝いている、キリストの十字架が。これが福音なんです。

私は福音書を読むと、福音書でキリストのことが出てきます。全部、

「お前に私が語っているよ」

と、こう響いてくるんです。この身边にキリストがいらっしゃる。読みましょ。キリストが私のそばにいて、

「お前のほうに私がついていいるから、大丈夫だよ」

と。福音書の言葉を読んでいるものは、ここにいてくださるキリストです。皆さんもぜひ、そういうように読んでください。

「聖霊、^{たすけぬし}助主、真理の御霊があなた方にくつついて、あなた方をすべての真理に導いていく」

と、ちゃんと約束なさっているわけです、ヨハネ伝の14章以下に。そうじゃないと、これはもたないですよ。パウロは言いました、

「自由を与えるために、キリストは来てくださった。自由を与えるために、あなた方を解き放した。二度と奴隷の軛^{くびき}につながれるな」

と。「奴隷の軛」とは何か。律法の世界です。律法の今までの世界です。ユダヤ人は律法があつて、その中に閉じこもっていた。我々は律法はないけれども、やっぱりこの中に閉じこもっている。どこまでも人間から出発して、理想に到達しようという努力していた姿だと。それとは別の道が示された。

「この中にとどまれ！ 絶対に救われなければだめだ」

というのがガラテヤ書です。

「自由を与えんために、キリストはあなた方を解き放した。二度と奴隷の軛につながれるな」

と。ところが、

「そんな十字架を信じて、キリストを信じるだけではだめだ。割礼を受けてユダヤ人らしくならなければだめだ」

とユダヤ人たちが言い出した。それでガラテヤの人たちはみな引っくり返った。それでパウロは嘆いて、

「あれだけ苦労して伝道したのに、みんな引っくり返った。いったい何のために私は苦労したのか」

ということを書いているのがガラテヤ書です。

「あなた方が聖霊を受けたのは、単純に聞いて信じたからではないのか。ほかに何があつたのか。単純に信じて、聖霊を受けて喜んでいたところへ、忍び



こんできたユダヤ人たちにかきまわされて、ぺちゃんこになった。くやしい」

それは確かに、ガラテヤのクリスチャンたちは、有頂天にパウロの福音に飛びついた。けれども、根っこがなかったから、引っくり返った。だから、さっき言いましたね、大学生くらいまでは、一生懸命に鍛えあげて、己の限界を知りなさい。自分がいかに空しい人間か。努力してもだめ、死というものには勝てない。就職先がない。どこにも何も芽が出ない。そしてたくさんの方が自死される。

「そうじゃない。きつと別の道があるよ。そこに賭けてごらん。今まであれだけ努力した、その思いををキリストにぶつけてごらん。そしたら、すうっと上げてくれる。気球に乗って上へ上げてくれるように。気球に乗せてもらったら、自然に行くよ。お前は重いおもりを体につけて、一生懸命にもがいて、天に上ろうとしていた。その健気な努力が評価されない。しかし、その努力が自分の限界を悟らせるための努力だったんだよ」と。

「結局、律法というものは本当にキリストへくる前の養育係だった」

ということをガラテヤ書は言っている。律法がなければ、キリストの有難さがわからない。律法というものをとおして、いかに人間がだめなものか、じかに神さまの前に立てないかということをよく知った人間がはじめてこの十字架の福音の有難さがわかる。それを何の苦勞もなしにポーンといただいて、「ああ、うれしい」と言っていたら足をすくわれてしまうよ、と言っているのがガラテヤ書だと思う。

ということは、わが日本においても、諸々の宗教があります。知識人も含めていろいろな方々がいらつしやる。その中で、

「なぜ今、キリストなのか。なぜ、あなたはキリストなのですか？」

と問われたときに、このローマ書やガラテヤ書といったものをもって、

「私はこれだ。私はここに立っている」

と答える。ルターがローマ法王を前にして、

「私は聖書の上に立っている。神よ、助けたまえ！」

という祈りをしたという。彼にとつての戦いの書は、ローマ書であり、ガラテヤ書だった。しかも、ルターにとつては、

「神の義は

審判の義ではなくて、

福音のうちに顕れ、信仰より信仰へ至らしめる」

という、あそこだったんです。だから、ルターはローマ法王を向こうに回して一步も引かなかった。そういう戦いをやった。

私達はそういう宗教的迫害の中にはおりませんけれども、本当にキリストのこの御意を



世の人たちに知っていただく、暗い世を明るい世にする。そのためには、まず一人ひとりから始まらなくてはいけない。

上からの政治ではだめです。政治は外側しかできません。金がどう動くか、どんな事業を起すかとか、要するにこの世のことです。相対的な善を求めているだけなんです。けれども、福音の世界はそれを突き抜けた、永遠の世界を求める。

人間は百歳が限度でしょ——ま、120歳までいくかな——せいぜいそのくらいで、百歳を越えてピンピンして生き生きしている人がどれだけいるかな。

「もう何もええことないわ。早く向こうへ連れて行ってね」

なんて言っているのがたくさんいます。そうじゃなくて、ますます輝きますよ。ますます向こうが近い。向こうを目の前にして輝いている。

「義の冠が私を待っている」

と、あのパウロの凱歌です。我々日本人として、それ以上に輝いて、キリストの証人^{あかしびと}となる。これがいちばんキリストご自身が願っておられる、パウロが願ってくれていることだと思う。そのために私が用いられていると、こういうことなんですよね。

ですから、「そんな高度なことはいらん」なんて仰らないで、やはり日本という国の中で、福音の証をたてるということは、本当にこれは大変なことです。しかも、それは皆さん一人ひとりが、

「私が証人である。私は福音の体現者である。なんとなれば、イエスという方が私に乗り移って、いつも護り導き、言葉を与えたもうから」と。

「人々の前に連れていかれた時に、何をしゃべろうかと心配いらん。その時に

聖霊が語るべき言葉を与えてくださる」

とパウロは言っているでしょ。だから、人間に難しいことを求めておられない。神さまに明け渡し、神さまが働く場面をたくさん作って差し上げることが大事です。人間に自信がある人は、神さまが入ってくるのを嫌がるんです。己があるから。そうじゃなくて、コテンパンにやられた人間はもう、働いていただく以外にないじゃないですか。働くこと自体がすごく楽しい。そして本当に不思議なことがいろいろと起こってくるわけですよ。人が生まれ変わるような姿になってくださったとか、今まで沈んでいた人が微笑みに変貌したりとか。私の場合は、病の癒しとか、そんな形では今のところ顕れてこないけれども、いろんな方が私をとおして、

「何か嬉しくなってきた。何か勇気をいただきました」

とか、それはあるんです。しかも、特定の人ではなくて、いろんな所で。これはやはりキリストが働いてくださっているからだと思います。

それは何も私が特別なのではない。皆さん一人ひとり、それぞれがなくてはならないお方なんです。何十億という人間が地球上にいます。その中で皆さんは何分の一なんですか。



本当に0.00000……というくらいからしの存在でしかないですよ。「吹けば飛ぶような将棋の駒も」という歌もありますように、そういう芥子粒からしのような存在なんですけれども、その芥子種一粒というものがどんなに凄いかということを、キリストは福音書の中で仰っている。

己を見たらだめです。特に年取ってから己を見たら、過去のいろんな嫌なことがずうつと甦よわいってくる。これは本当に嫌ですよ。齢よわいを重ねるということがどれだけ苦しみを伴うこととか、自己を苦しめる。そうじゃなくて、それは全部を十字架でキリストが受けとつてくださった。だからそれは全部預けます。私は常に真っ白です。そして前に向かって、上に向かって進みます。そのためには、絶えずこの聖書の言葉、キリストの言葉、パウロの言葉、これに絶えず触れている必要がある。これが私の体験です。

ある人は非常に「祈り、祈り、祈り」と仰る。私はあまり長い時間、祈りというのは苦手なんです。むしろ私は聖書を開く。聖書を開くと、この身に向かってキリストが語りかけてくれる。そうすると、今までの私の思い煩いは全部消えてしまう。ピリピ書に、

「⁶何事をも思い煩うな、ただ事ごとに祈りをなし、願いをなし、感謝して汝らの求めを神に告げよ。⁷さらば凡て人の思いにすぐる神の平安は、汝らの心と思いとをキリスト・イエスによりて守らん。」(ピリピ4・6～7)

と全部、書いてある。

「そのとおり、そのとおり、そのとおり」と、心は自然に主を讃美している。キリストと対話しているような、それが私の祈りなんです。

私にとっては、この小さな聖書は、いついかなる時でも肌身離さず持っています。ほかの聖書ではだめなんです、これでない。もう垢にまみれ、色を塗り、赤線を引き、そういう形で私の体の一部分になっていますから、これを絶えず持つている。……(小池辰雄聖書講筈「無量愛」(1967/9/3)、第14回夏期福音特別集会『ピリピ書』、二女恵子の誕生の話など割愛)……

いろんなたくさんものを読んでいたらだめです。大事なもののだけを限定して読む。皆さん、それぞれのお立場がありましょう。「自分はこれをやりたい、あれをやりたい」ということがあります。けれども、それらをひつくるめて、すべてをキリストに献げきる。委ねきったときに、

「お前はこれを生きてよー」

と、そういう導きがあれば、それに従う。これが、さっきのイサクを献げた信です。「イサクを献げる」というのは、「己を献げる」ということです。そういうことがいちばん御意にかなう。それは人智ではできない。どこまでも神の力、聖霊の力による。すべては神さまの恵み。恵みの力、御霊の力です。御霊からの喜びです。

そういうことですので、この辺で終わることにいたします。



● 祈り

主イエス・キリストさま。台風一過のごときこの晴れた空の下で、外は暑くはございませけれども、あなたは輝く太陽となつて、私達の前に現れてくださいました。そして、この静かな涼やかな部屋におきまして、昔、イエス・キリストをとおして顕されたあなたの福音、そしてパウロをとおして論証された福音の素晴らしき。これを二時間以上にわたつてとつぷりと、語る者も聴く者も一つ心、一つ思いで味わうことができました。

どうか、私どもが現代に生きる日本の一人として、どうか、一人ひとりがわが同胞にまた世界の人々に、

「キリストというのはこういうお方だ。あのパウロが呻いているように、本当にこのお方こそが究極の救い主であり、我々を無条件に受け入れ、無条件に神の子とし、神の国を受け継がせ、永遠の生命の中に活かしめ給うお方である」

ことを証する。それには何も献げるものがない。ただ自分自身をあなたの御手にお委ねする。あなたは私達を捕まえて離し給わない。

「お前と私は一つだよ。私がお前を捕まえた。もう離さない」

と。あなたの御力が一人ひとりを捕まえて、もはや脱出を許し給いませぬ。それが恵みの福音でございます。こういう素晴らしいものに、今日おいでになった方々が必ずや目を開かれ、そして喜び、その中に生きる道を見出してくださいと、信じとうございます。

主よ、どうぞ、これから我々が祈りを共にしながら、本当に真理の道を歩ましめてください。真理は人を活かします。真理は人を自由にします。人を愛します。本当に和をもたらします。このような純粋なあなたの愛の福音を我々が身に体して、この国を明るくしていくことができますようにお導きください。病に苦しんでいる方や、いろんな問題で悩んでいる方々にも、神の御力を顕してください。どんな問題も、主さまのところへ持っていけば、必ずあなたがそれぞれを解決してください。

どうぞ、そのようにして、御名を讃えることができますように。感謝してこの祈りを、皆さまのお祈りと合わせて、聖前に捧げたてまつります。アーメン。



●新約聖書『ローマ書(第1回) レジユメ

2010年7月18日(日) 新宿集会にて 奥田昌道

I 新約聖書の中での『ローマ書』の位置づけ

書かれたのは紀元56年～57年頃かと考えられている。コリントから書き送られた。

パウロは、スペインへ行くつもりで、先ずエルサレムを訪問した後、しばらくローマに滞在する計画を立てていた。『ローマ書』はその準備のために記された(15・22～25、同・28～29参照)。

はじめに四福音書との関係をみておく。マタイ・マルコ・ルカの三福音書は、「共観福音書」と呼ばれる。共通点は、イエス・キリストの伝道活動を時間的順序に従って再現しようとしていることである。マルコ福音書を原型として、マタイ福音書では旧約聖書(律法と預言書)との対比においてキリストの告知された福音の内容が遙かにそれを超えた深く高い内容のものであるかがキリストの言葉と御業において顕されている。ユダヤ教から改宗してキリスト信者になった者やユダヤ教徒への語りかけの面が顕著である。ルカ福音書は異邦人への語りかけの面が強く現れていて、旧約聖書との対比はほとんど出てこない。こうした違いは見られるものの、共通点は、キリストの説かれた福音の内容は、父なる神(天の父)の無条件・絶対の愛と、人の側ではそれを無条件に受け取ること(神の愛の体現者はイエスご自身であるから、この方を信じ受け入れること)が救いであることをしめしていることである。そして、キリストご自身の父なる神への無条件の信従(従順)・平伏しの姿(相)が描かれるとともに、宗教的指導者層(祭司、律法学者、パリサイ人ら)の偽善や律法への固執、そこから来る同胞への愛の欠如が厳しくとがめられている。他方では、イエスは決して律法を否定しておられない。むしろ、その根本精神を尊び、その成就を願っておられる。もつとも重要な掟は何かをめぐる問答において、明確に

「心を尽し、精神を尽し、思いを尽し、力を尽して、あなたの神である主を愛すること」

「隣人を自分自身のように愛すること」

を示された(マタイ22・34～40、マルコ12・28～34、ルカ10・25～28)。また、「永遠の生命を受け継ぐ道」を求めている問答において、モーセの十戒を挙げて答えておられる(マタイ19・16～22、マルコ10・17～22、ルカ18・18～23)。

要約すれば、キリストにすがりつく以外に救い(罪・咎の重荷、重篤な病の苦しみ、死の恐怖、貧窮のどん底での苦しみの解決)の道を見出し得ない人々にとっては、神の無条件の愛を信受し、御意に己が身を捧げることが福音であったのに対し、律法遵守を旨とし、偽善の中にありながら己を正しき者と自認して他を裁く人たちに対しては、真の律法の体現の姿を示されたのである。

ヨハネ福音書では、全く様相が異なる。律法遵守による「永遠の生命」の獲得といった



ことは問題とされていない。

「人は新たに生れなければ、神の国に入ることができない。」

「肉から生れる者は肉であり、霊から生まれる者は霊である。」

「人を活かすものは霊であつて、肉は役立たない。私の語った言葉は、霊であり生命である。」

「神は霊であるから、拝する者も霊と真をもつて拝さなければならない。」

「神はその独り子を賜ったほどに世を愛してくださった。信じる者が滅びないで、永遠の生命を得るためである。」

「神が遣わされた者を信じることが、神の業である。」

そして、14～16章では、聖霊・助け主・真理の御霊のことが語られ、このお方に内住していただき、このお方に導かれ、一如となつて生きることが御旨にかなう道であることが示されている。

成立年代からみれば、『ローマ書』は、57年前後とされているのに対し、マルコ福音書は65～68年頃、マタイ福音書とルカ福音書は80年代、ヨハネ福音書は90～125年頃とされている。

『ローマ書』の特色・内容はこの講演において、順次見て行くこととする。

II 『ローマ書』の内容(要点)

1 第1章

1・1 キリスト・イエスの僕、使徒、福音の使者。

1・2～4 福音とはイエスに関するおとずれ(使信)の全体Ⅱイエス・キリストの全体。

1・16 この福音は、すべて信ずる者に救いを得させる神の力。

1・17 神の義は、その福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。

2 第2章

神には偏り視給うことなし。

外面・外見・外側ではなく、内面・内実が大切。

3 第3章

義人なし、一人だになし。

律法遵守によつては、誰一人として神の前に義とされない。

「然るに今や律法の外に神の義は顕れたり」Ⅱ「神の義は福音のうちに顕れたり」。
イエス・キリスト(霊的人格・復活して神の御許にいまし、今も生きて働いておられるキリスト)に帰依・帰入・祈入すること、全托することが「信仰」の実質。

4 第4章

「主は我らの罪のために付され、我らの義とせられんために甦らせられ給へるなり。」(4・25)

